
召喚《よ》ばれた異世界《さき》で

T r agweite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚よめばれた異世界よめで

【Nコード】

N6149P

【作者名】

Tragweite

【あらすじ】

ある日、普通の高校生だった『東条直樹』は、謎の少女と出会い異世界へと召喚されてしまう。その少女曰く、どうやら直樹は世界を救う『勇者』というやつらしいのだ。

いまいち実感のわかない直樹だが、最近、ゲームにハマっている所為か、『勇者』を引き受けてしまう。

一方、世界では外獣と呼ばれるモンスター達が人々を苦しめていた。しかし、そんな状況になっても自国の繁栄を優先させる貴族たちは、

いがみ合い、滑稽な内輪もめを続けている。

全てにかかる『責任』という重み。

果たして、直樹は『勇者』となれるのだろうか？

01……異世界からの迎え

「眠い……」

朝のラッシュに揉まれながら、彼、東條直樹はようやく目的地にたどり着いた。

どこにでもいそうな地味な少年。特徴が無いのが特徴といった具合の少年だ。目はさも眠そうに虚ろに開かれ、適当に整えられた髪には寝癖のあとが残っている。決して良くもなく、だからといって悪いわけでもない顔立ちには、あきらかな不機嫌が張り付いていた。なんとなく友人から借りた、ロールプレイングゲーム R P G にハマってしまい、怒涛の速度でクリアしたのは先週の金曜日。一息つこうとテレビを点けたところ、偶然にも続編が発売されることを知ってしまった。

慌てて、近くのショップに駆け込んで予約を試みたが既に完売。

店員さん曰く「人気タイトルだから、どこも似たようなもんだよ」だそうだ。

それから、偉大なるインターネットを駆使して、情報を集めたところ、一部の店舗で発売日当日に店頭販売があるらしいと知って、遠足の前日の子供のような思いで夜を明かし、彼は秋葉原へとやってきていた。

木曜日であるがゲーム会社の陰謀か今日は秋分の日、つまりは祝日ということだ。

自動改札を抜けた先、電気街口から覗く駅前は、既に賑わいを見せていた。

（それにしても……）

眠い。暑い。だるい。

もう9月半ばにもなるというのに、一向に気温は下がる気配を見せない今年の夏。

まだ、南中高度には程遠いにもかかわらず、既に気温は不快に感

じるには十分なまでに上がっている。

空を見上げれば、すがすがしいまでに晴れ渡る空が広がっている。青く澄んだ空がこれほどとなく憎らしく思えた。こういう日くらい太陽も休んで欲しいものだ。

かといって雨は嫌だけど……

などど都合のいい天気を願っても天候が変わるはずなどない。

ふて腐れたように、とぼとぼと歩き出すと、10分もしない内に身体からは汗が滲んでくる。

(うへえ……)

暑さに負けて、リュックの脇に入れていた飲み物に手を伸ばす。

伸ばした手がペットボトルを掴んで、ため息をついた。

「温い」

仕方なく、温くなったジュースを飲むが、ちつとも潤った感じがしない。やはり、冷たいものをと自販機を探してみるが、こういうときに限って見当たらない。

彼は諦めた様子で、さまざまなコード類や無線機を取り扱う店を横目に、目的の店へと足を向けた。

だが、そのゲームが手に入るのはしばらく延期になりそうだ。

数分後。

直樹が大通りを渡ろうと交差点を歩いて行く。丁度、中央の辺りに差し掛かったところで異変は起^{それ}こった。

耳にフィルターが掛かったような、何かがずれたような、どこか釈然としない感覚。

——ミツケタ——

「誰だ！」

不意に声が聞こえて、直樹は思わず直樹は声を上げた。

上げて、直樹は周囲を見回した。暑さによるものとは別の汗が噴出すようだ。熱をもっていた身体が、今は熱を失ったようにひんやりと冷たくなっていくように思えた。

しかし、傍から見れば拳動不審の少年にしか見えなかった。突然、

声を上げたかと思えば、必死に何かを探すようにしきりに辺りを見回している。

周りの注目が集まって、直樹はようやく自分の行動に気がついた。突き刺さるような数奇な視線に、なんともいえない気まずい感覚が全身を走り抜けていく。

やがて、歩行者用の信号が点滅を始め、早く渡りきってしまおうと、対岸へと視線を移したとき、それが目に入った。

少女だ。

交差点の真ん中に少女が立っている。

赤いラインの入った白魔導師のような、白色のローブ姿をした少女。いるのだけど、いないようなそんな印象を直樹は受けた。

「なん、なんだ……」

状況が理解できず、驚いた表情でその少女を見つめている直樹。

碧色の瞳が直樹へと向けられた。

「たすけて」

それは、今にも掻き消えそうな小声だった。

普通ならば、街の雑踏によって掻き消されてしまうであろう、儼い音だ。だが、今、この瞬間、時が止まり静寂が訪れでもしたかのように、その声は確かに直樹の耳に届いていた。

実際、世界は止ま^{まわり}っていた。

まるで、絶対零度の凍気が舞い降りでもしたかのように、行き交う人も点滅していた信号も全て凍りついたように静止していた。

だが、直樹にはその光景がまるで見えていないように、少女をただじっと見つめていた。

「たすけてっ たっ てな……」

どうしていいか分からず頭を掻いた。

「おねがい。じかんがないの」

その声は震えていた。

——タスケテ——

声が頭の中で響く、エコーが掛かったように響いて、やがて違う

声へと変化する。

「たすけて」

甦る記憶。それは、忘れていた。いや、忘れようとしていた記憶の欠片。

直樹は胸の奥から這い上がってくるものを押しこんで、

「分かった」

と、言って頷いた。

「ありがとう」

少女ははかなげな笑顔を浮かべると、なにやら訳の分からない言葉を使い始める。

「イエリエス オー アミ イネラウ オガク エチシヨス ウク
フクシュ ウアゲン」

どう聞いても思いつくがままに言葉を並べているとしか思えないような台詞だった。

しかし、それでいて全くの出鱈目だと思えないのは、少女の顔が真剣だったからなのかも知れない。

「オワリボト アミイノコク！」

少女が両手を前に力強くかざした。

光。まばゆい光が直樹を包んだ。それは、やわらかくあたたかな優しい光。

そして、ゆっくりと吸い込まれるように、直樹は意識を失った。

ぼんやりと、何かがゆれていると感じた。

最初は地震でも起きたのかと考えた。

否定。

思考が少し回復し、揺れているのが自分の身体だと気がついて、直樹は、はっと目を開けた。

決して強くない光だが、開いたばかりの目には眩く感じて、直樹は目を細めた。

「うつ……」

立ち込める緑の臭いが鼻についた。一瞬、むせ返りそうになって、呼吸が止まる。なみだ目になりながら、直樹は呼吸を整えた。

「アチスマイクト アギク？」

不意に少女に覗き込まれ、驚いた直樹は思わず変な声を上げた。

（ここは……？）

少女の顔を避けるようにゆっくりと身体を起こし、ゆっくりと立ち上がる。

辺りを見回して、ここが森の中だということは理解できた。どんよりとした薄暗さが気になって、直樹は空を見上げた。

うつそうと茂った木々の枝が、空と大地を隔てるように覆っている。そのため、日の光は遮られ、枝の隙間から差し込む明かりだけが森を照らしていた。

見下ろすと、畳んで地面に敷いてある深緑のコートが目に入った。よく見ると、畳まれたコートの中央が丸く窪んでいる。

（そうか……）

これを頭に敷いてくれていたんだ。通りで髪が汚れていないわけだ。

おもむろに直樹はコートを拾い上げ、それを軽く掃ってから少女の前へと差し出した。

淡いピンク色のショートヘアに年相応といった幼い顔立ち、マシユマロのようなほっぺたには愛嬌があつてかわいらしいと感じた。

碧色の瞳が差し出されたコートを追って動き、それを両手で受け取った。

「ありがとな」

少女が、訝しげな表情で見上げている。

「どうした？」

「アクサミラカウ オトクレッチ オン イサタウ？」

「……え？」

困惑する直樹。しかし、冗談で言っている風には見えないし、聞こえない。

「えーっと……」

言葉が見つからない。外国人に道を尋ねられた時のような焦りが直樹を襲った。

少女はその異変を感じ取ったのか、なにやら呪文のようなものを唱え始めた。

そういえば、こちらに来る時も何か、呪文めいた事を言っていたのを思い出す。

「イエリエス オー エテブス オン イラタデ オー エアマチスカン」

少女の足元に、紋章が光とともに浮かび上がる。光は徐々に力を増して、薄闇を押しつける。

その光景は、それなりに神秘的だった。

思わず見入っていた。ファンタジー映画の世界にでも入り込んだようで、心の奥に熱い何かが生まれる感じがした。

光が弾けるように消える。先ほどの光景がまるで夢か、幻でもあったかのように辺りは平穏そのものだ。

「伝わってますか？」

直樹の反応で伝わっていることを確認した少女は、ホッと胸を撫で下ろした。

「何したんだ？」

「意思疎通の魔法です。私も、そっちに行くときに使ってたんですよ？」

緊張感のないふわふわとした声で、少女が説明する。

直樹は最初に会話が出来ていたことを思い出して、納得しそうになった。

「ちよ、ちよっと待て……。今、魔法って言ったよな？」

「そうですね？」

何かおかしいですか？　とでも言わんばかりの視線が向けられる。直樹は一瞬、考えた。

だが、先ほどの呪文的な言葉とあの光景。

さらに、突然、日本語を話し始めたことを考えれば、本当に魔法なのだと、おぼろげには理解できた。

一瞬、夢でも見ているのではと思ったが、すぐに否定する。

夢にしてはリアリティがありすぎるし、なんとなくだが、これが夢ではないという確信が直樹にはあった。

「これを」

少女が差し出したのは一本の剣（きん）だった。

「これは？」

「剣です」

「いや、それは分かるけど。他の荷物は？」

「と、とりあえず、受け取ってくださいませんか……」

剣を持ち上げた細い腕が、プルプルと震えていた。

とりあえず、と直樹は下から支えるように剣を受け取った。だが、不思議な事に重さは一切、感じなかった。まるで、体の一部でもあるかのように、そこにあるということだけが感じられた。

脳裏に浮かぶ、さまざまな疑問を確かめる術はただひとつだ。

「それで？」

「はい？」

「はい？　じゃねえよ！」

それは、一種の癖みたいなものだった。

直樹は反射的に少女に軽いチョップを食らわせていた。

「ふぎやつ！？」

少女は驚きと痛みでその場にしゃがみこむ。

そこまで力を入れたつもりは無かったのだが、少女の反応が直樹に罪悪感を与えた。

「わ、悪い……。なんか反射的にな……」

おでこを両手で抑えながら、少女は立ち上がる。

潤んだ瞳が宙を泳いでいる。

（まさか、意味が分かっているのか？）

「おい！」

「ああ」

手をポンと叩いて頷く少女。ようやく理解できたらしい。

「それでは、説明するです」

えへん、と平らな胸を張って説明を始める少女。

「それはそうと、さっきまでと違ってえらく元気だな」

「それはそうですよ」

少女は、さも当たり前そうに答えた。

「だって、あの世界には魔力がないんですから」

そう言った後で少女は、

「いやあ、死ぬかと思いましたよあ」

などと笑顔で締めくくった。

「実際、かなりギリギリだったのですよ……」

突然、声のトーンが落ちた。

「あなたを見つけた時にはもう魔力がほとんどなくて、上手く話せなかったですし……」

なるほどな、と直樹は納得した。

あの、今にも消えそうな声は、それが原因だったのか。

「まあ、結果的にはその状態で良かったわけだけだな」

「どうしてです？」

「そのテンションでこられたら、間違いなく信じなかったから」

「えゝひどいですよあ」

2人は声を上げて笑った。静かな森を2人の発した音が、木々に反響し、あるいは木々の隙間をすり抜けるように響いていく。

「あ、俺は直樹、東条直樹」

「ナオスケ？」

「直樹だよ！」

「ふぎやつ！？」

再び、直樹のチョップが炸裂する。

「冗談ですよ」

額を押さえながら少女は訴えた。

この少女が言うのと全く冗談に聞こえない。

「私はレミイ、レミイ・D・ステビア」

「甘味料？」

「はい？」

「いや、レミイね」

「よろしくです。ナオキさん」

「ん？ 別にナオキでいいさ、俺もレミイって呼ぶから」

「わかりました」

軽く自己紹介も済んだところで、直樹は切り出した。

「それじゃレミイ、色々と説明よろしく」

「……」

「……なんのです？」

「お前なあ……」

ふつふつと沸きあがる感情を押さえ込む。

「冗談ですよ」

直樹は、狼狽しそうになるのをなんとか堪えた。間違いなく顔は

引きつっているだろう。

まったく、この子は……。さすがにここまでくると怒りをと通り

越して呆れてしまう。

何度目だろうか。

「全くもう……」

直樹は、ため息を漏らした。

「幸せ、逃げちゃいますよ？」

「誰のせいだ、誰の」

「？」

「わからんらしい」

直樹は、再びため息を零すのだった。

ようやく説明が始まったのは、それから少し後。

「まず、この世界について説明するですね」

言ってレミイは近くにあった石へと腰を下ろし、説明を始めた。
直樹も、近場にあった倒木に腰を下ろす。

「この世界……私たちがパステルと読んでいる世界には3つの大陸があつて、私はフェラルディア大陸にあるフェラルディア王国からやってきました」

聞きなれない単語の連続にめまいを覚えながらも、直樹は耳を傾けた。

「そして、フェラルディア王国は今、危険な状態なんです。あちこちで『外獣』が現れてたくさんの人が困っています。そして、それは預言書に記されている『災厄』の第一歩なんだつて、お姉ちゃんが言っていました」

「ちよつとまで、もっと分かりやすく言ってくれないか？」

「え……」

言葉に詰まるレミイ。

「とにかく、世界の一大事つてことです」

「一大事ねえ……」

いまいち実感がわかないが、レミイ自身そこまで詳しくは知らされていないのかもしれない。それか、説明がとてつもなく苦手ということもある。

そこで、直樹はとりあえず質問をぶつけてみることにした。

「それで、お姉ちゃんつてのは？」

「私のお姉ちゃん、教会のとってもえらい人です」

「んじゃ、教会つてのは？」

「世界各地にあつて、外獣から人々を守るお仕事だそうです」

「それじゃ、外獣つてのは？」

「外獣というのは、とっても危険な存在で、人々を傷つける危ない存在です」

「その災厄ってのは？」

「なんでも世界が滅ぶかともいう、大変なものらしいですよ」

そこまで聞いたところで、なんとなくだが、理解したことがあった。

まず、このレミイという少女は実際のところ、詳しいことは何も知らないようだ。全ての質問に答える前に必ず、思い出すように考え込む場面は何度もあった。なにより、全てにおいて聞いた話です、といった話し方をしている。

「それで、ここはどこだ？ それに俺の持ってた荷物の行方も気になるんだけど？」

「えっと……」

今までとは違い、明らかかな動揺があった。戸惑い、動き回っていた瞳が、今は明らかに下へと向いて落ち着いている。そして、ためらいながらもレミイは口を開く。開いた口から言葉が紡がれるまでには若干の間があった。

「わかりません」

レミイは不安そうに、そう零した。

「は？」

その一言で、直樹は目の前が一瞬、真っ白に染まった。いや、真っ黒だったのかも知れない。しかし、ショックだったのは間違いなかった。

「ごめんなさい。私にも分からないんです」

今にも泣き出しそうな顔で、レミイは頭を下げた。

そして、ショックを受けていたのは彼女も同じだった。

それを察してか、直樹はレミイを責めようとはしなかった。出来なかったとも言える。

2人の間を、空白の時間が流れていく。直樹も何か言葉を探してみるのが見つからないといった様子で視線を伏せている。

森は静寂に包まれていた。

「たぶんですけど……」

その静寂を打ち破ったのはレミイだった。うつむいたまま、レミイは慎重に言葉を紡いでいく。

「私の魔力がほとんどなかったせいで、門が不安定だったのかもしれないません。そのせいで、こんな場所に出てしまったんだと思います。荷物もきつと別の場所に……」

そして、レミイは再び、ごめんなさいと言って頭を下げた。

「なら、まずこの森を出よう」

「え？」

涙を蓄えた瞳が直樹に向けられた。

「いや、だってこんなとこにいたって何もわかんないだろ？」

「それは……そうですね……」

レミイの言いたいことはそういうことではない。だが、それを分かった上で直樹は言い続ける。レミイの言葉を挟む余地など与えぬように。

「森を出て、誰かに聞けばわかるだろ、今いる場所さえ分かれば帰れるんじゃないのか？」

レミイは答えなかった。今にも溢れそうな涙を蓄えた瞳でじつと直樹を見つめ。そして、ゆっくりと頷いた。その拍子に涙が地面に落ちて消えた。

「なら急ごう、野宿なんて絶対に勘弁だからな」

言い切って、直樹が立ちあがり、それを追うようにレミイも立ち上がった。ぱたぱたと服を掃って、レミイは顔を上げた。その顔は、躊躇いがちな微笑みへと変わっていた。

歩きながらも会話は続いていた。

「へえ、それじゃレミイは、俺を迎えに来るだけだったわけか」

「そうですよ」

「それで、レミイがいた教会ってのはどこにあるんだ？」

「王都イオリスですよ」

「なら、そこが目的地ってトコか」

「あ、でも教会はいろんな街にありますから」

「ってことは？」

「とりあえず近くの教会に行けば、大丈夫だと思います」

少しずつではあるが、道が見えてきたように思えた。とりあえず、何とかこの森さえ抜けければ、どうにかかなりそうだと分かっただけ救いだっただ。レミイも既に元氣を取り戻した様子で、直樹の質問に、分かる範囲でだが答えていた。

「それで、話を戻すけどさ」

「なんですか？」

「俺は一体、何で呼ばれたんだ？」

「それは、この世界を救うためですよ」

あっさりと言われ、直樹は理解に遅れた。

「だって、ナオキは勇者様なんですから」

直樹が足を止める。

一度、深呼吸をして訊き直した。

「よく聞こえなかった。もう一回、頼む」

「そうですか？ では、もう一度言いますよ」

レミイは咳払いして、ゆっくりと言い直した。

「ナオキは勇者様で、この世界を救うんです」

レミイのうれしそうな言葉に狼狽しながら、ふらついた足元を立て直す。

「ちょっと待ってくれ」

それがどうして自分なのか？ 勇者ってなんなんだ？ などとい

う疑問はどうでもよかった。

「俺は、そんなことをしに来たんじゃないんだ」

はっきりと言った。

（ちがう）

俺が来た理由はそんなじゃない……

「俺は、レミイが助けてって言ったからここに来た」

「だから助けて欲しいんです。この世界を」

「……無理だ」

いくらなんでも、スケールが違いすぎる。俯いたその顔には、諦めにも似た表情が張り付いていた。

だが、同時に心の奥にやってみたいという思いが生まれていたのも事実だった。

少年は悩んでいた。

心では、諦める自分とやってみたいと思う自分が激しくせめぎあっている。彼の冷静な部分が、諦める理由を並び立て、好奇心とレミイを助けたいという想いが、それを否定する。

否定して、やはり無理なのではと、どこかで諦める。その繰り返しだ。

「でも、ナオキは勇者です！ それは間違いないです！」

レミイが力強く断言した。

「聖剣でなければ、世界は救えないって、お姉ちゃんが言ってました。そして、それが聖剣です」

レミイの指差したものは、直樹の左手に握られていた。

「ああ、忘れてた」

重さを感じない不思議な剣。あまりの軽さに、持っていたことを忘れていたほどだ。

「なんでこれが聖剣だと？」

「だって、ナオキが最初から持っていたものだから」

「えっ？」

「私は眠っていたナオキから、預かっただけですよ」

直樹はてつきり、護身用にでもとレミイが用意したものだと思っていた。重さを感じないのは、レミイが魔法か何かで重量をどうにかしているんだろうと、勝手に解釈していた。

レミイが重そうにしていたのは、たとえ軽くしても体系的に自身で扱えないからなのだとばかり思っていたのだが違ったらしい。

「じゃあ本当に……」

直樹は剣へと視線を注いだ。

何の変哲もない剣——とはいえ、実際に剣を見たのは初めてであるが——そう思った。

聖剣と呼ぶにはあまりにも質素な造りだと思わざるを得ない。

その剣は、柄の部分は茶色く、青い鞘に収められているだけのシンブルなものだ。

イメージとしては竜の飾り物が施されていたり、煌びやかな装飾で飾られたものや、なにか特殊な宝珠をはめ込む場所があったりするものを想像していただけに、どこか味気ないといった思いが込み上げていた。

同時に自分が、がっかりしているという事に気がついて驚いた。

「そっか……」

無理だと、思考は言っている。

うるさい。

そんなこと出来るはずがないと、理性は言っている。

黙れ。

やってみないと、心は叫んでいる。

それが、本音だ。

ならばいつそ、直樹は開き直すことにした。

レミイはお姉ちゃんの指示とやらの従い、わざわざ世界を超えてまで迎えに来たわけだ。

そして、この世界にきた途端、見知らぬ剣を持っていて、それが聖剣なのだという。その証拠かは分からないが、その剣は重さを感じず、不思議なくらいに手に馴染んでいる。

少なくとも、人違いではないはずだ。それに、レミイが嘘を言っているようには思えないし、思いたくもない。

結果、自分はレミイの言葉を借りるならば勇者だということになる。そして、世界を救うのだともレミイは言っていた。ならば、可能性として凄い力が眠っていたりするのかも知れないのでは……と思ったりもする。

それこそ、漫画やゲームの中の世界のような話だが、実際にその一端を経験してしまった以上、可能性が全くないとは言い切れないはずだ。

そう思った瞬間、答えは決まった。

「俺はただの高校生で、剣で戦ったことなんてないし、持った事もない素人だ。けど、もしそんな俺が何か出来るのなら、出来る範囲で協力したいって思うよ」

ゆっくりとかみ締めるように、レミイはその言葉を聴いていた。

「やっぱり、ナオキは勇者です」

目に涙を浮かべながら、レミイはうれしそうに笑っていた。

（だけど、まだ分からないことも沢山あるんだ……）

そして、それを解決する最も手っ取り早い手段も分かっている。

まず、レミイのお姉ちゃんとやらに会う。会って、詳しい内容を聞かせてもらう。案外、世界の救い方まで、ご丁寧に説明してくれるかもしれない。やるべきことが分かれば、協力だって出来るだろう。

「ま、その前にはまず、この森を抜けないとな」

「はい！」

おーっとレミイが右手を空へと掲げ、2人は軽くなった足取りで長く使われていないであろう、この道を進み始めた。進む方向は最初の直感で決めた。2人とも分からないのでそうする他なかったのも事実だった。

落ちた枝を踏み砕き、湿った落ち葉を踏みしめながら、薄暗い森を進んでいく。木々の隙間から覗く空は、まだ明るさを保っている

ように見える。だが、正確な時間もわからない今としては、一刻も早く森を抜けたいところだ。

「平気か？」

「はい！ 私は元気ですよ！」

「きつかったら言えよ、俺はおんぶも抱っこもお断りだからな」

「大丈夫です、ナオキに迷惑は掛けません」

そんなつもりで言ったのではなかったのだが、どうもこのレミイという少女は、責任感が強いらしい。こうしてここにいることが、自分の所為だとも言っていたし、今も迷惑は掛けまいと額に汗を浮かべながら懸命な表情で歩いている。

直樹は、レミイに気づかれないうちに、彼女を盗み見た。

外見的には10歳くらいだろう、小柄、というのもあるのかもしれない。それでも、やはり子供だと思った。かといって自分が大人というわけではないが、それはある一種の使命感のようなものが芽生え始めているを感じた瞬間だった。

直樹に兄妹はいないが、もしかするとこれが妹を守ろうとする兄の気持ちなのかもな、と直樹は思っ、苦笑した。

「それで、レミイのお姉ちゃんってどんな人なんだ？」

「それはですね〜」

質問に対する反応が明らかに違っていた。それ以前に、お姉ちゃんという単語に反応しているように思った。それだけで、よほどお姉ちゃんが好きなのだろうという事も分かった。

「それはそれは、やさしくて、きれいで、かつこよくて、強くて、凛々しくて、可憐で、優雅で、美しくて、やさしくて、きれいで…」

「もういい。よくわかった」

知っているほめ言葉を一通り並べたような回答に、とりあえず直樹はそう答えた。しかも、最後のほうは2週目に入っていたし。止めなければこのまま、無限ループに入っていたことだろう。

憂鬱な気分になりながら、直樹は薄暗い森を進み続けた。

「ん？」

直樹がその気配に気づけたのは、ある意味偶然だった。異世界に
来たことで感覚が敏感になっていたのかもしれない。だが、その気
配に気づかなければ、2人の未来はここで終わっていたかもしれないな
かった。

「どうしました？」

突然立ち止まった直樹に、レミイが歩み寄って尋ねる。

「何か、いる」

不意に茂みからガサツという音がした。

「なんでしよう？」

2人の視線が茂みへと注がれる。この森の薄暗さと静けさが、余
計に不気味さを演出し、2人に不安という重圧を掛けていく。それ
は、ゆっくりと全身に纏わり付くように、広がっていく。

直樹は、レミイを庇うように前へと立ち位置を変えた。重圧で足
が上がらず、足を擦るようにして動く。

緊張が高まり、辺りの空気ごと固まったような感覚を覚えながら、
直樹は額を伝う汗を感じた。

茂みの中から影が飛び出したのと、直樹が動いたのは、ほぼ同時
のこと。直樹は押し倒すようにレミイを庇った。

倒れ込む2人の背後を、影が通り抜ける。

その差は刹那。

幸い、土が軟らかかったおかげで、怪我こそしなかったが、服は
泥で汚れてしまったことだろう。咄嗟についた掌には湿った土が粘
土のように張り付いている。

覆いかぶさった格好のまま、直樹は視線を後ろへと動かした。
視界の先にいたのは一見、狼のような獣だった。

大きさは、見た目は狼のそれに良く似ており、大差はない。口元
からは鋭く尖った牙が覗き、紅く染まった眼からは凶暴性が感じら
れた。

体毛は頭に近いほど黒く染まり、尻尾へ近づくほど灰色へと近づ

いていく。

「が、外獣……」

レミイが震えた声で呟いた。

紅く染まった眼が、直樹たちに向けられた。感じられるのは、恐怖意外のなにものでもない。

2人は慎重に立ち上がった。狼から視線を外さないように、視線を固定したまま、刺激しないようにじりじりと動いていく。

「逃げましよう、ナオキ」

不安と恐怖の織り交ざった表情で、レミイが提案した。

「どうして？」

「この種類は、群れで狩りを行うと聞きました。囲まれる前に逃げるべきです」

——ヴウウウウウウウ——

喉を鳴らしながら黒みがかった灰色の体毛が逆立てて、狼は身を低くした。

今に飛び掛りそうな雰囲気を纏わせながら、狼は威嚇するように直樹たちを睨みつけていた。

（どうする）

握った拳に力が籠る。

戦うか？ 一応、武器はあるが……

勝てるのか？ 分らない。

汗が肌を伝うのを感じる。

逃げると理性は言っている。

しかし、本能は戦えと叫んでいた。

02……闘走劇へとうそっげき

02……闘走劇とうそうげき

薄闇の森を2人は走っていた。

前を走る直樹がレミイの手を引く形で走っている。

「ナオキ……私、もう……」

「ダメだ！ 走れ！」

「でもっ……」

それ以上は、息が続かず言葉が出てこなかった。

肺が酸素を求めるが、需要に対して供給が追いつかず、もつれる足を無理やり動かして走り続ける。半ば、直樹に引きずられるように惰性でただ進んでいた。

口の中がカラカラに乾いている。唾を飲み込もうにも、呼吸がそれを阻んでいる。

背後が気になるが、振り返っている余裕など存在する隙間さえなく、すぐ後ろには外獣がいるかもしれないという不安だけが膨らんでいく。

やがて不安に負けて、レミイは躊躇いながらも振り返った。

「あっ！」

一瞬の油断。足元の注意がわずかに疎かになった。

木の根に足を取られ、レミイはバランスを崩した。

直樹と繋がっていた右手に負荷がかかり、千切れるように手が離れる。そのまま、レミイは地面へと倒れ込んだ。

直樹がレミイへと素早く駆け寄り、立ち上がらせようと、手をさし伸ばしたが、レミイは静かに首を横に振って答えた。

ようやく安息を得た肺が、ここぞとばかりに酸素を欲して盛大に

空気を吸い込んだ。息を吐いて、一瞬、クラツとしたが、かまわず深呼吸を続けた。

情性で走っていたレミイには最早、自力で走り出す力は残されていなかった。それ以前に、走ることはおるか、立ち上がることさえ難しい。

「ナオキ……逃げて……」

たったそれだけの言葉を紡ぐのも、今のレミイには重労働だった。直ぐに呼吸に集中。忘れていたかのように疲労が全身に伝染していく。全身が重い。焦燥だけが膨らんで、思考が単一化されていく。動かなきゃ、動かなきゃ、動かなきゃ……そう考えても足は僅かに痙攣するだけで、レミイの意思に従おうとはしなかった。

「逃げて……」

唇が震える。疲労と恐怖が重なって言葉さえままならない自分が腹立たしかった。

直樹は、ただ立ち尽くすようにレミイを見下ろしている。

レミイは見上げた視線を直樹の瞳へと向けた。

後ろから、何かが近づいてくる音がする。

間違いなくあの狼だ。

（どうして）

ナオキは逃げないのだろう？ 逃げてと言ったのは聞こえていたはずだ。なのに、なんでナオキはそこにたっているんだろう。

「逃げるかよ」

「え？」

「レミイを置いていくなんて、出来ない」

「だけど……」

このままでは、あの狼のような外獣がやってくる。そして、いずれは、群れとなって襲ってくるのだだろう。そうなれば2人とも助からない。ならばせめて、勇者であるナオキだけは生きて欲しい。そう思った。

なのに、どうして……

こんなにうれしいのだろう。

レミイは頬を伝う涙の感触に気がついた。

「あ、ああ……」

レミイはいつの間にか泣いていた。

直樹がレミイの背中側に立った。それは、立ち塞がったというベきかもしれない。そんな少年の背中を、レミイは見つめている。決して大きくはない背中。だが、レミイにはこの上なく頼もしい盾に見えた。

それこそ、どんな困難も防いでしまう盾のように……

同時に、何も出来ない自分が悔しかった。せめて魔力があればと思う。だが、生憎と失った魔力はほとんど回復していない。一時的には戻ったが、先ほどの全力疾走で再び、失われていた。

魔力は人が生きる活力の一部だ。身体が異常をきたせば、当然魔力にも影響がでる。

水分を含んで、湿り気を帯びてくる服に不快感を感じながら、レミイはナオキの背中をじっと見つめていた。

「精霊の加護があらんことを……」

そして、ただ心から彼の無事を祈った。

深呼吸。

随分馴れたとはいえ、やはりこの澱のように満ちた緑の臭いにはいまだに嫌悪感がある。風がないせいで、どんよりとした空気が、ずっと漂っているのかもしれない。吸い込むと、胸の奥に不快感が溜まっていく感じがする。吐き出したいと思い、息を吐けば、再び臭気が鼻腔を刺激する。

左手の聖剣を握る力が増した。

何かが近づいてくるのが分かる。遠くから、がさがさと茂みを駆ける音が、徐々に近づいている。

思い出すのは、少し前。外獣と遭遇した時のことだ。

レミイが逃げることを提案して、自分は何をした。

レミイの手をとって逃げ出したんだ。

それは、レミイの事を想つての行動じゃなく、単に怖かった。

それだけだ。

1人で逃げることに、見知らぬ世界で1人になることに、酷く恐怖を感じた。それだけだ。この世界で唯一、自分を知っている存在であるレミイがいなくなることが、怖かった。

茶色い柄を握り、一気に引き抜いた。金属のこすれる音と共に、銀色の刀身が姿を現した。

その剣は曇りひとつない美しいものだった。思わず見入りそうなほどに、輝きを放っている。

その輝きがこの薄暗さを押しのけているようにも見えた。

直樹は構えた。剣道のそれだった。自身はなかったが、身体は今なお記憶し続けているらしい。だが、実際に動くかはやってみるしかなかった。両目で銀の切っ先を注視する。日本人が生まれ持った黒い瞳が真っ直ぐに前を見つめている。その中心に切っ先がある。

足音が近づく、今このときは森の静寂はありがたかった。

存在を撒き散らすように、走るあの足音は簡単に聞き取れた。

無駄な力を抜いて、直樹はただその時を待った。

茂みが動き、狼の姿をした外獣が現れた。

身体を震わせて、毛に付いた草を払うと喉を鳴らした。

紅く鋭い肉食獣の眼光が直樹を射抜く。

だが、直樹は動じない。視線上の切っ先をまるで、銃の照準を合わせるように、外獣へ重ねた。

外獣が間合いを計るように、数歩動く。直樹は向きだけを合わせ、その場から動くことは一切ない。

沈黙の時間が流れる。

額を汗が伝う。自分の鼓動が、やけに大きく聞こえていた。外獣が身構える。

来る！　そう思った瞬間、そのときは訪れた。

重心を左へ移動させながら視線は外獣を追いつけていた。
鋭く尖った爪が。牙が迫った。

剣を傾け水平に。そして、外獣へと一歩踏み込んだ。

その踏み込みを剣へと乗せる。

斬線は斜め上へと走った。

抵抗は一瞬、直ぐにやわらかい感触へと変わった。

まるで、豆腐でも切るような滑らかな一閃。

外獣は腹部から上下に両断され、上下が同時に地面へと落ちた。

隠れていた臓物が腹部の内から零れ、赤黒い体液が地面に染みを
広げ、あたりに強烈な腐臭を振りまいた。

「うつ……」

胃の奥からこみ上げてくるものを何とか飲み込んで、直樹は息を
吐いた。

直ぐにこの場から立ち去りたい気持ちになったが、レミイのこ
事を考えればそうもいかない。

直樹は袖で口と鼻を覆いながら、レミイに歩み寄ると静かに声を
掛けた。

「大丈夫か？」

「は、はい……」

一部始終を見ていたレミイは、今起きた出来事を直ぐには理解で
きなかった。だが、直樹の声と顔を見て、徐々にそれを理解した様
子で、両手が宙を彷徨い、言葉にならない嗚咽を漏らしている。

彷徨った手を、直樹の手がそつと掴んだ。

体温を感じて、本当の意味で理解したのかもしれない。

「ナオキ……」

「ああ」

「ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナ
オキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、ナオキ、
ナオキ、ナオキ、ナオキ……」

レミイはただ繰り返し直樹の名を呼び続けた。

やがて、その声が鳴き声に変わるまで、直樹は返事を続けた。同時に、生きていることを実感して、目じりが厚くなるのを感じた。

だが、完全に安心することは出来なかった。

レミイの言葉通りならこの場に長居は出来ないということだ。

安息は一時、生きていることを喜びながら、更なる困難が目の前にあった。

だが、まだ絶望したりはしない。

ようやく、見つかったかもしれないんだ。

ずっと探していた、自分のやりたいことが。

（それを）

何もせぬまま終わっていいはずがない。そんなことは、絶対に嫌だとはつきりと分かる。

直樹は空を見上げた。

隙間から覗く空が、僅かに違った色に見えた。

「落ち着いた？」

「はい。ごめんなさいです」

「なんで、謝るんだ？」

「取り乱しちゃったから」

「気にすることないよ」

「はい……」

落ち着いてまず始めに感じたのは自己嫌悪だった。まさか、あんな大泣きを披露するとは思っても見なかった。

ため息をついてから、自身の魔力を確認する。

（だめか）

もう一度ため息を零す。

多少は回復しているものの、やはりまだ魔法を使える状態ではな

いと判断し、ナオキに話すのがまた少し遅れることに抵抗を覚えつつ、レミイは無力な自分に3度目のため息を零した。

もしかすると、この森の魔力濃度が薄いのかも知れない。

一般的に、魔力を使う者は必ず、空気中の魔力を呼吸によって体内に取り入れることで、回復を図る。当然、自然回復もあるが、人である以上、呼吸は必須なのだから、合わせて行ったほうが効率がいい。

つまり、呼吸による魔力回復力は空気中の魔力の濃度によって左右されるということだ。薄ければ遅くなり、濃ければ回復は早まるかといって濃ければ良いというものでもないのだが。

「ナオキは大丈夫なんですか？」

無言の直樹が気になって声を掛けた。

「ああ、うん俺は大丈夫だよ」

こちらを向いた顔には、少し疲れた笑みが張り付いていた。

「もし、動けるようなら、この場を離れたいんだけど、大丈夫そう？」

「はい。もう歩けそうです」

少し場所を移したとはいえ、やはりあの強烈な臭気からはそうそう逃げられるものではない。地を這うようにやってきて、鼻に突いた。レミイも出来れば早々に、おさらばしたいと思っていた。

腰を下ろしていた岩から立ち上がって身なりを確認。随分と汚れている。ローブの裾のほうが少し破れていた。だが、別に気落ちしたりはしなかった。

直樹が脇に置いていた聖剣を手にとって歩き始めたのを追うように歩き始めた。

最初と違い、どこか精彩に欠けている2人が森を歩いていく。森の薄暗さが、彼等の心情を表しているようだ。

（こんなことなら……）

戦闘を終えたあとにナオキから言われた言葉が思い出される。

「おぶろつか？」

そう訊かれて、レミイは断った。迷惑は掛けたくないと思つてのことだ。ナオキだつて疲れているはずだ。そんな彼にこれ以上の負担は掛けたくないと思つた。

でも、それは単なる言い訳に過ぎない。

結局のところ、意地なのだ。

自分が誰かの役に立てると思つて、魔法を習つてきた。

どの程度役に立ったかは分からないけど、少しでも役に立てているなら嬉しいと思う。

泣いてばかりで、お姉ちゃんに迷惑ばかり掛けてきた。だから、せめて泣くのはやめようと決めたはずなのに。

それが、まさかこんなところで泣いてしまうとは、自分ながら情けないと思う。

いや、泣いてしまったことはもういい……

良くはないのだが、忘れることにしよう。一番の問題は、外獣一匹に何もできなかったことだ。

外獣に関しては記録や、お姉ちゃんやアリシアさんから教えてもらった事しか分からないけど、さっきの外獣は間違いなく、最低ランクの外獣だ。

魔法でいろいろなことが出来るようになり、ちよつとは強くなれたと思つていたけど、それは間違つていたらしい。

考えれば考えるほど、暗鬱な気分は増すばかりだ。

それに、先ほどから会話というものがまるでない。

(やっぱり)

おぶつて貰えばよかったかな……

そうしていれば、あるいは今とは違つて、会話もあつたのかも知れないのになと、後悔する。

「はあ……」

「4回目だ」

「えっ？」

「ため息だよ、幸せが逃げるぞ？」

「数えてたんですか？」

「やることないしな」

笑った直樹の顔はまさに、少年のそれだった。純粹でいてどこかいたずらな笑みだ。

「あんまり、気にすんな」

「はい？」

「どうせ、責任感じて落ち込んでるんだろ」

「それは……」

「帰る場所が違ってたことも、外獣に襲われたこともあくまで事故だ、レミイの所為なんかじゃない」

また泣きそうになって、レミイは下を向いた。若干だが暗くなっているようにも思えて、今度は見上げた。

木々の間から覗く空を見る限り、まだ日が沈むまでには余裕がありそうだ。だが、確かに空は変化を続けている。夕方、そして夜へ向かって刻々と変わり続けているのだ。

なんとしても日が傾くまでには、開けた場所に出なければ。

もし、再び外獣に襲われるなど、考えたくもなかった。

「ナオキ？」

直樹が立ち止まっている。

レミイの脳裏に嫌な予想が浮かぶ。

「まさか……」

その、まさかだった。

狼の姿をした外獣。さつき直樹が倒したものと同種だと直ぐに分かる。

だが、今度は一匹ではすまなかった。

2人を取り囲むように次々と、次々と……

その数が二桁を超えた辺りで、レミイは全身から何かが失われていくのを感じた

半分だけ開いたままの口が動いている。

だが、言葉を、音を発するわけでもなく、ただ顎が上下に動いているだけだ。

目は驚愕に見開かれたまま、瞳だけが震えるようにせわしなく移動を繰り返す。顔は色を失い、青白い肌が無機質に張り付いている。思考だけは自分でも驚くほどに冷静さを保っていた。それは、恐怖や驚きを通り越した状況に理解だけが取り残されていたのかも知れない。

「あ……あ……」

言葉が出ないことに気がついて、ようやく理解が追いついた。

首から下が、まるで切り離されたかのようにピクリとも動かさない。そして、それが分かることによって、理解は混乱へと変化した。一体、何が起きているのだ？ 自分は今、何をしていた？

「……キ……ナ……オキ」

なんだろう？ 音が、混乱にブレーキを掛けた。生き物のように暴れていた思考が、構造を変化させるように組み変わっていく。

「ナオキ！」

次の音は、声だと認識出来た。同時に左から嫌な感じが迫り、目だけを動かして確認する。

「くっ！？」

反射的に左手を突き出したことが幸いした。力任せに差し出された腕に握られていた聖剣が、それにぶつかって弾いた。反動で後ろによろめくと、そのまま尻餅をつく格好で倒れた。

鈍い痛みがお尻から伝わって、直樹は表情を歪めた。

「ナオキ！」

レミイが側まで駆け寄り、しゃがみ込む。

「大丈夫ですか？」

「ああ」

気のない返事を返し、直樹はふらつきながら立ち上がった。

前を見れば、嫌でも沢山の外獣が目に入る。後ろをちらっと見たが、結果は同じだった。左右の茂みからも言い知れぬ、気配が漂っている。

鼓動が高鳴る。

ただただどうするかだけを考え続けているが、答えは出ない。外獣たちは一定の距離を保ったまま動く様子はない。一斉に飛び掛られれば、一瞬であの鋭い牙と爪の餌食になってしまうことだろう。だが、そうしてくる様子がないのは、ありがたくも不気味だった。にらみ合いが始まってどのくらいの時間が経ったのだろう。実際はそんなに経っていないのかもしれないし、とても長い時間こうしていたのかも知れない。

徐々に身を削られていくような感覚に耐えながら、直樹は出口のない迷宮を彷徨っていた。

それは唐突に終わりを告げた。

その圧倒的な存在を、2人はただ眺めていた。

目の前にいる外獣。狼に良く似たそれを数倍に巨大化させたものが、そこに聳えていた。体毛は濃い紺色。頭側が濃く、尻尾側が薄いのは小さいものと同様だが、存在感そのものは最早、別物だった。それは、ゆっくりとやってきた。

一歩ずつ大地を踏みしめるように、悠然と雄雄しき風格を纏ってそれはやってきた。

威圧に満ちた眼が2人を見下ろしている。空気さえ脅えたように震えている。

その眼光の前では恐怖さえ、喉の奥に封じ込められてしまう。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

天へと叫ぶように、それが咆哮を上げた。大気が震え、風が起った。風は小さな嵐のように、塵を巻き上げて森を吹き抜ける。ビリビリとした大気を肌で受けながら、2人は逃げ場を求めるように寄り添った。

「タイラント……ウルフ……」

ぼそぼそとレミイが呟いたのを直樹は意識の遠くで聞いていた。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

再び、タイラント・ウルフが吼えた。

震えた大気が鼓膜を通して、頭へと響く。耳の奥がガーガーと鳴ってうるさいと感じた。

そして、今の咆哮が戦いの始まりを意味していた。行け。

そう命じられたかのように、狼たちが動きを見せた。

入れ替わるように2匹が蛇行しながら距離を詰め、1匹が直樹へと襲い掛かった。

直樹は鞘を捨てるようにして剣を抜き、両腕で力いっぱい振った。

斜めに振り下ろされた一撃が、刃が飛び掛ってきた外獣を捕らえた。

「!？」

重い衝撃が両腕に伝わって、最初とは違った感触を覚えながらも直樹は剣を振りぬいた。

狼は地面へと叩きつけられ、そのまま滑り、止まる。

(やった)

確かな手ごたえに、直樹は確信していた。

だが、狼がよろよろと身体を起こす。牙が覗く口からは、赤黒い液体が滴り落ちている。

「なんで……」

振りぬかれた斬撃は、外獣を切り裂いていたはずだった。刃は確かに外獣を捉えていた。それは間違いない。

だが、確かにこうして外獣は立ち上がっている。ダメージは与えたようだが、死んではない。

一度固まったものが崩れて、直樹は愕然となった。

これが、初撃だったならば、そういうこともあるのだと、思っただけだったかもしれない。

直樹は一度、外獣を切っている。その感触を知っている。

それは自信へとつながり、彼に勇気をもたらした。

だが、その自信が仇になった。

築き上げたものが、一瞬にして失われていく恐怖がそこにあった。突然、足元が崩れ落ちて、深淵へと落ちていくように、彼は深い虚へと落ちていった。

呆然と立ち尽くす直樹を、もう1匹の狼が見逃すはずもない。

大地を蹴って、すぐさま向きを変えると、狼は本能のままに襲い掛かった。

直樹はただ前を向いたまま動かない。視線は目の前にいる狼でもなく、奥に佇むタイラントへと向けられている。いや、それさえ突き抜けて、もっと遠くのものへと向けられていたのかも知れない。

だが、その瞳には何も『見えて』などいなかった。

少女は呆然と眺めていた。

それしか出来なかったとも言える。

恐怖が身体を蝕み、自由を奪っている。

狼が少年へと飛び掛った。

次の瞬間を想像して青くなったのは一瞬、少年は持っていた剣を抜き、振った。

狼が呻いて、地面へと叩きつけられる光景を見て、その瞬間が訪れなかったことに安堵する。

「ナオキ？」

少女が少年の名を呟いた。

ナオキの様子が明らかにおかしいと分かり、レミイは視線を動かした。

斬られたはずの狼がよろよろと身体を起こしていた。
なぜ？ と、問いかける。

間違いなく斬ったように見えた。だが、こうして狼は身体を起こしている。そして、別の1匹が今まさにナオキへと迫っていた。「危ない！」と心が叫びをあげて軋む。胸が痛くて、ぎゅっと胸元を掴んだ。

掴んだ手は震えていた。

なぜ？ 再び問いかける。

なぜ、私はここにいます？

私は一体、何をしているのだろうか？

強い衝動が、身体を拘束していた鎖を引きちぎる力を与えた。

筋肉が軋むように悲鳴を上げる感覚を振り払うように、少女は駆け出した。

（今度は私が助けるんだ）

魔力は万全とは程遠い。だが、それを言い訳になどしない。

少女は細く小さい足で大地を踏みしめて進んだ。

走りながら少女は……レミイは祈るように言葉を紡ぐ。

守りたいという一心で、その言葉ひとつひとつに祈りを込めて。

「精霊よ 守護者たる慈愛をもって 我らを守りたまえ！」

深い深い暗闇に光が差した。

その光を掴み取るうと手を伸ばす。

指先が光に触れ、暗闇は真っ白に染まった。

「なんで……」

「何でここにいます」とは言えなかった。直感的に言うてはいけな気がして、直樹は言葉を止めた。

「私は、迎えなんです……」

狼がレミイに牙を剥いて襲い掛かる。

「あぶな……！？」

庇おうとした動きが驚愕で凍りついた。

光の壁が狼の牙を、爪を防いでいる。

「私は、ナオキを、勇者を迎えに来たんです」

言葉が、だんだんと強くなっていく。

「それが、私がここにいる理由です！ 使命ですっ！」

言い続ける。

「私が、ナオキを守るんです！」

言い放った言葉には、はつきりとした思惟が籠っていた。

その姿に直樹は美しさに似たものを感じていた。きらめいたそれはレミイの心の表れだった。純真な心の輝きに、直樹は息を呑んだ。幾度目か分からない狼の攻撃が襲い掛かる。

だが、レミイはその場にしっかりと足を食い込ませて、鋭い爪と牙による攻撃を凌いでいる。

額に汗を浮かべながら、苦い表情で懸命に守っている。

だが、いずれ限界は訪れる。それは容易に理解できた。徐々にではあるが、レミイの表情が曇っている。それが分かってか、分からないでか攻撃は激しさを増していく。

累積された負荷が集中力を魔力を奪っていく。

そして、限界はやってきた。

それも、最悪の形となって。

（やめろ、やめてくれ）

願っても届くはずがない。

相手は人の形を成してすらないのだ。願いなど、届くはずもない。

だが、それでも願うほかなかった。

タイラント・ウルフ……

傍観者がいま殺戮者へと変わろうとしている。

2人はタイラント・ウルフの影に吞まれ、見上げていた。巨大な、先ほどとは比較にならない爪が振り上げられた。そして、躊躇も慈悲もなくそれは振り下ろされた。

あれほどの攻撃を凌いでいた光の壁が、まるでなかったように打ち砕かれ、レミイが宙を舞った。

ドサツという音と共に、直樹の後ろへとレミイの身体が落ちた。振り向くことも出来ず、直樹は一步、また一步と後ずさりする。

当然、足元への注意などしているはずもなく、木の根に足を取られ、転んだ。

尻餅をついた姿勢のまま、引きずるように後ろへと下がっていく。やがて、指先がレミイに触れた。ゆっくりと視線を動かしてレミイを見る。

うつぶせに倒れたレミイはピクリとも動こうとはせず、血の気を失った顔は、まぶたを閉じたまま沈黙を保っている。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

三度、タイラント・ウルフが咆哮を上げた。

それは終わりを告げるチャイムでもあるように、タイラント・ウルフが奔り出した。

巨体が大地を駆ける振動に、まず襲われた。

（死ぬ……）

振動の波に揺らぎながら、直樹は目の前の運命を淡々と受け止めた。

直樹は握っていた聖剣も落とし、ただなんとなく迫り来るものを見つめる。死ぬ。自分は死ぬんだ。その現実が分かっている、どうすることもできない自分を感じていた。

「くそっ……」

息を吐いた。

（ちくしょう）

くやしいと思った。何も出来ずに死ぬのがこんなにもくやしいのだと知った。だが、もはや思考さえ停止する目前だった。だから、次の瞬間に起きた出来事を、直樹は驚くこともなく見ている事が出来た。

紅い光を纏った何かが舞い降りた。

直樹は一瞬、全ての時間が停止したように思えた。

「はあああああつ！」

紅い光が収束し、放たれた。

光は、巨大な殺戮者とぶつかって弾けた。

閃光が迸り、視界を奪う。同時に何者かが直樹とレミイの身体を掴んで宙へと持ち上げた。

そのまま少し離れた位置で着地すると、その者は直樹の顔を覗き込んだ。

「少年！」

凜とした声で、直樹は僅かに思考を取り戻した。

赤い燃えるような瞳が直樹を見つめている。

「少年！ 名は！？」

「なおき……とうじょう……直樹」

名を訊かれて、ぼんやりと答える。

「直樹だな、よし、いいかよく聞け。絶対にここを動くな、絶対だ。いいな！」

強く念を押されて、直樹は無言のままうなずいた。

「よし、待っている。なるだけ早く片付ける」

走り去る後姿を眺めて、直樹はそれが女性だったのだと初めて知った。

既に夕方へと片足を踏み入れた森で、彼女は剣を構えた。

シンプルな両刃のそれは鈍い輝きを放ち、ところどころには傷が残っている。一見して使い古された一振り。彼女の相棒だ。

彼女の名はセシリー・マーフェス。

黒いインナーに胸当て、肩当て、ブーツ、そして首元にはアクセサリーが輝いている。動きやすさを重視した軽装といった姿。年の頃は20代前半。

燃え盛る炎のような色の赤いポニーテール、少し太めの鋭い眉の下には意思の宿った瞳が前を見据えている。

彼女がここに居、そして直樹たちを助けることになったのは全くの偶然だった。

街道を歩いていると、そこに森へのわき道があった。

考える。考えて彼女は森を抜ける道を選んだ。

目的地の方向はわかっている。そして森はそこに向かって最短距離で広がっている。

別段、急ぐ旅でもなく、もしかするとちょっとした抜け道なのではないか、という好奇心に負けて彼女はその道を選んだ。

街道を外れればそれだけで危険が伴う。ましてや、地図にもっていないような森へ入るといふのは危険極まりない行動だ。

しかし、それが危険だというのは、普段危険とは無縁な者の言葉だとセシリーは思っていた。

常日頃から危険の中に身を置く彼女には街道を離れることくらい危険のうちに入らないとさえ感じてしまう。

賞金稼ぎ、傭兵、ハンター。そういった世界で彼女は生きている。それ以外に選択肢がなかったとも言える。いや、最初はどうであれ、選択肢はいくらでもあった。だが、その全てを蹴って、彼女は今もおこの世界に身を置いている。

「さて、と」

目の前に存在する巨大なそれを見ても彼女は特に、驚きもせず静かに言った。

タイラント・ウルフ。外獣ランクBの下。言い換えればBランクの入門編と言ったところだ。

身体を覆う体毛は意外に硬く、巨軀からは想像できないほど動きは俊敏、尚且つタフだ。しかも、周りを取り巻く狼はこれほどなく鬱陶しく、その血液は強烈な臭気で仲間を呼び寄せる。

長年の経験から培ってきた知識が、セシリーの意味とは無関係に呼び起こされる。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

咆哮。大気が震え、木々がざわめいた。

セシリーが剣を構え、狼達が一斉に動く。

「ほう」

わかるのか。

本能というのは恐ろしいものだな。

セシリーは内心で舌を巻いた。

狼たちが迫る。

いきなりだ。

獲物を弱らせる過程を飛び越して、いきなり全力で襲い掛かってきた。

肉付きのいい引き締まった身体が薄闇に覆われた森を疾駆する。赤いポニーテールが風に靡いて揺れていた。

「はあっ！」

睨み据えた瞳が細くなる。

まずは2匹。

迷いなく振りぬかれた斬撃が、狼の頭部を的確に捕らえ、切り落とす。

瞬間、背後に気配。

セシリーは刃を戻すことなく、振りぬいた姿勢のまま回転運動へと変える。

なぎ払うように刃が走り、さらに2匹の狼が地面に落ちる。

「ちっ……」

巨大な圧力を感じて、セシリーは舌打ちした。

がきん——という音が響いて、圧力の正体、タイラント・ウルフは上へと首を向けた。

煌きが迫る。朱を帯びた空を背中にして、赤い煌きが舞い降りる。一閃。

空中で放たれた赤い斬線が、濃紺の巨軀を切り裂いた。そのまま斬線はそのまま地面に落ちてもうもくと土煙を巻き上げた。

「ちっ」

着地ざまにセシリーは舌打ちする。

（浅いな）

土煙から影が覗く、右の前足から赤黒い液体を流しているのが見えたが、大したダメージになっていないように思えなかった。

紅い眼がセシリーを凝視した。部下を殺し、自らを傷つけた生き物を捉えていた。

タイラント・ウルフが喉を鳴らす。

そこは先ほどよりもいくらか開けた場所だった。

狼たちがセシリーを取り囲み、身構える。一気に仕掛けるつもりだろう。

嵐の前の静けさが辺りに訪れる。

「ふうん」

セシリーが鼻を鳴らす。それは好都合だともいうように。

「まとめて片付けよう」

セシリーは剣を振り上げる。切っ先を天に向け、セシリーは集中力を高めていく。赤い光が剣に宿り膨らんでいき、剣を包み込むように進む。まるで剣そのものが燃えてでも居るかのように、赤い光はゆらゆらとたち昇っていた。

「はあああああああつ！」

魔導剣術応用変化——土蜘蛛。

セシリーは勢いよく剣を地面へと突き立てた。剣を包む赤い光を、ごく当たり前のようには解き放つ。

ただ放つのではなく、一塊に。

地面に穿たれた切っ先から地下へと光が吸い込まれて消える。

が、直ぐに変化は訪れた。巨人が跪いたような大きな音と振動が静寂を打ち破って、大気を大地を震わせた。

瞬間、膨らむように大地が爆散した。

爆発はセシリーを中心に蜘蛛の巣のように広がっていく。

舞い散る土砂と共に大地から舞い上がった土石が、隆起した鋭い

岩が、足元から狼たちに襲い掛かる。

吹き飛ばされ、石を喰らい、鋭い岩に貫かれ、叩きつけられて狼たちは次々に絶命していった。

粉塵が周囲を覆い、取り巻いている。

タイラント・ウルフは獲物を探すようにそれをじっと睨みつけている。

ふわっと粉塵が割れ、影が飛び出した。

魔導剣術応用変化——電光石火。

爆発的な加速を利用した一撃は、まさに雷光の如く奔り、止まった。威風堂々といった雰囲気を漂わせて、セシリーはゆっくりと振り向いた。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

タイラント・ウルフが雄たけびを上げている。

しぶといとは思わなかった。仕損じたことは手ごたえで分かっていた。だが、確かな一撃を与えたことも分かっている。

タイラント・ウルフの右目が潰れていた。それだけではない、身体にも決して浅くはない傷が線を描いてはつきりと残っている。傷からは、赤黒い液体がとめどなく溢れ、滴り落ちている。タイラント・ウルフは痛みに身もだえするように喉を鳴らしている。

「まだ来るか？」

空気をかき混ぜていた切っ先が正眼に止まる。

タイラント・ウルフは赤い眼を歪ませたままセシリーを睨んでいる。恨みを、怨念を乗せた視線を肌で受けながら、周囲を包んでいた殺気が薄れていくのを感じた。

（退くか）

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

タイラント・ウルフは咆哮を上げると、森の奥へと姿を消した。

「ふう……」

全身の緊張を緩めるようにセシリーは息を吐いた。
終わった。

追う事も出来た。だが、今度はあちらのテリトリーに踏み込むことになる。仕事なら別だが、不意の遭遇戦でそこまでのリスクを負う意味はない。

セシリーは剣を鞘へ収めた。

キン、という乾いた音が鳴って、本当に全身が緩んだように思えた。

「さて」

セシリーは踵を返して、先ほど助けた少年の許へと向かった。

（たしか……）

直樹とか言ったか。変わった名前だと思う。

それにあの格好……

（埒もないか）

思考を切り捨て、足を早めた。

夕方の空は茜色から夜に向かって変化を始めている。

夜の帳はもう直ぐそこまで来ていた。

変化していく光景をただ呆然と眺めていた。

時間の流れを、周囲の変化を、ただ漠然と瞳が映している。

それは、時の流れに取り残され、世界から忘れ去られているようでもあった。

「生きてる、んだな……」

実感する。

幾ばくか闇の濃くなった森の肌寒さ。

いつの間にか慣れていた緑の臭い。

手のひらから伝わる土の感触。

それら全てが生きていることを教えていた。

徐々に思考は回復し、全身に血の流れが甦っていく。

体温が上がっていくのを感じながら、直樹は背中の中を思い出

した。

「レミイ……」

よろよると向きを変える。熱を失っていた体が未だに言うことを
きかないのが腹立たしく思えた。

青い顔でレミイが倒れている。

（俺の所為だ）

レミイの手に触れる。ぬくもりが伝わるのと同時に、胸がいつば
いになっていく。

頬を伝う感触。

ずっと忘れていた感触。

こういう時、どうすればいい？

目の前で倒れている少女に、何をしてあげればいいのか。それが、
わからない。

ここが異世界だということも忘れて、直樹はポケットを探った。

目当てのものはない。あるはずがないのだ。

たとえ、それがあつたとしても、何も変わりはないということ
にさえ、今の直樹に気づく余裕などあるはずもなかった。

そして、すぐるようにレミイの身体へと手を伸ばした。

「おい！」

伸ばした手が、無造作に掴まれた。

「けが人に触れるときは、もっと慎重にな」

「え……？」

引き締まった腕を伝うように、視線が上へと動いていく。

「あなたは……」

その瞳には覚えがあつた。

強く、まっすぐな赤い瞳。

脳裏に凜とした声が甦り、時間が逆行したように、思い起こされ
る記憶。

あの時、赤い光を纏い、外獣から守ってくれた人。

呆然としていてはつきりとは覚えていない。だが、この燃えるような赤い髪と強い眼差しは印象に残っている。

「すまない、遅くなったな」

視線の先にいた女性はやさしく微笑んでいた。

「私はセシリー、ただの通りすがりだ」

名乗って、セシリーはしゃがみ込んだ。慎重な手つきでレミイを仰向けにすると、四肢に軽く触れて怪我の具合を確認する。その手が四肢から身体、首、頭と移り最後に額をやさしく撫でた。

その光景を直樹は無言のまま、じっと見つめていた。

「おいおい、そんな怖い顔をするな」

その視線に気づいて、セシリーは苦笑いを浮かべながら額に触れていた手を離れた。

「大丈夫。見たところ、怪我の程度はそこまで酷くはない。

だが、医者に見せたほうがいいのは確かだ。私は医者ではないからな、細かいところまでは診れん」

やんわりと、言い聞かせるように言葉を紡いだ。

言葉が、身体に染み込むように溶けていく。

「本当ですか……？」

視線がレミイへと向けられる。ほんの少しだけ、身体が軽くなった気がした。

「ああ」

微笑みながら答え、セシリーは一枚の紙を取り出した。

「いいか、直樹？」

セシリーは、紙を直樹の前で広げて見せた。

描かれていたのは簡単な地図だ。

薄暗くて酷く見づらいが、決して読めないわけではない。

「このまままっすぐ進めば街道に出る。そこから北に少しいけば、小さな村がある。そこに行けば、医者もいる。きっと、力になってくれるはずだ」

セシリーは立ち上がって、直樹へと手を差し出した。

目の前に差し出された手を直樹は掴んだ。ぐっと力が籠り、直樹を引っ張るようにして立ち上がらせると、直樹の両肩をばんばんと叩いた。

「ありがとうございました……」

戸惑い気味に頭を下げた。

「言うのが、遅いつ！」

再び肩を叩かれる。

「今度はお前が助ける、私がお前を助けたように。お前はこの子を助ける」

「はい」

レミイを背負い、剣を左手に持った。

背中に掛かる重さが、心地よく思えた。

「そういえば、どうして俺の名を？」

「なんだ、覚えていないのか」

「ええ……」

「最初に名前を聞いたぞ、私は。そして、お前が自分で答えたんだぞ」

全く覚えがない直樹は空返事だけ返して、苦笑をした。

「私は自分の荷物を取ってくるから、先に行ってくれ。すぐに追いつく」

「分かりました」

森の奥へと進んでいくセシリーを見送る事もなく、踵を返して直樹は歩き出す。レミイを助けるという決意と怪我をさせたという後悔を抱えて……。

03..... じゃるじゃる (揺る揺る)

03……できること

「それはどういうことかね、騎士アリシア」

玉座に座したまま、初老の男が言った。豪華な装飾の施された服装を纏った男だ。年齢よりも白みの混じった髪と皺がさまざまな苦悩を表しているかのようだ。

彼の名はマルクス・フェラルディア。

この国、フェラルディア王国の国王だ。

大陸の西から中央に広がるこの国は、気候に恵まれ、豊かな自然に囲まれた国だ。

大陸の東には険しい山脈が連なることからこの国は、国と国とを繋げる重要な役割をはたしている。そのため、様々な物資の交易拠点となり、商業国家として今なお発展を続けている。

ここはそのフェラルディア王国、王都イオリスにある城の奥、玉座の間、謁見の間とも呼ばれる場所だ。広い室内には玉座へと続く紅い絨毯が敷かれ、出入り口には甲冑に身を包んだ兵士が2人。王の周りにも親衛隊が4人警護に当たっている。それ以外にも、将軍や摂政といった国を動かす者たちが一同に集まっていた。つまり、それほど深刻な話だということだ。

「騎士アリシア、詳しく話せ」

マルクス王の脇に控えていた老人が、一步踏み出しながら言った。フェラルディア王国の摂政、ガイウス卿だ。国王に続いてこの国を支える者の一人であり、マルクス王の叔父でもある。

「魔を討つ者を探すべく、彼の地に出向いた使いが未だ戻っておりません」

王の前に跪いた姿勢のまま女性が答えた。青を基調とした装飾付の軽鎧を纏い、金色の長髪をうなじのあたりで束ねている。瞳の色は緑。やや陰があるが、真っ直ぐで力強い眼だ。

彼女の言葉に一同がざわめいた。

「静粛に！」

間髪入れず、ガイウスが制した。

「つまりは失敗した、ということかね？」

「それは……」

アリシアは言葉に詰まった。

「いいえ、まだ失敗と決まったわけではありません」

凜とした声が、玉座の間に響いた。広い部屋であるにも関わらずその声はよく響いた。

すべての者が声の主へと視線を向ける。ただ一人、アリシアだけは、その姿勢を維持したまま静かに下を向いている。

玉座の間、その入り口に、黒色を主に置いた上着と、スカートに身を包んだ女性が立っていた。

淡い桜色の長髪が腰まで伸びた、落ち着いた雰囲気のある女性だ。その後ろでは見張りの兵士が慌てた様子で手を伸ばしている。

本来、謁見中の部屋の出入りは固く禁じられている。この女性が兵士の静止を無視して入ってきたのは想像に難くないことだった。

「ビショップ、リンリイどうしてここに？」

言ってマルクス王は、困惑する入り口の兵を手で制し、下がらせた。

「リンリイ様、申し訳ありません」

傍らへと歩み寄ったリンリイにアリシアが謝罪する。

「あなたが謝る必要などありませんよ、騎士アリシア」

微笑んで、アリシアの肩にやさしく手を触れる。

そして、リンリイはマルクス王の方へと向き直ると一度頭を下げる。

「ここからは先は、私からご報告させていただいてもよろしいでしょうか？」

尋ねるといふよりも確認というような言い方に、ガイウス卿が顔を顰めた。顰めて王へと視線を移動させる。

「よかるう。続けてくれ、ビショップリンリィ」

だが、王にそれを気にする様子は微塵もなく、ガイウスは苛立ちを覚えた。

が、そんなガイウスの胸中などおかまいなく、リンリィは話し始める。

「確かに、彼の地へ向かった使いが未だ戻っていないのは事実です。私達が彼の地では長く生きていられないことは前回、ご報告いたしました。もしも、魔を討つ者が見つからなかったとしても、報告に戻るはずです」

「事故によつて戻れなかったとは、考えられないのかね？」

「確かに、その可能性は否定できません。しかし、同じように他の可能性も否定は出来ません」

「その言い方だと、何か思い当たることがあるように聞こえるのだが？」

「その通りです陛下。ですから、私が直接ここに来たのです」

「どういうことかね？」

マルクス王があごを撫でながら怪訝な表情を浮かべている。

「その為にも、少しばかり騎士団から人をお借りしたいのですが？」

「騎士団を使つて貰うのは構わんが、理由を聞いても構わないかね」

「勿論、お話いたします」

言つて、リンリィはアリシアの下へと歩み寄つた。

「騎士アリシア、ここは私に任せて、あなたはお借りした騎士団を率いて事に当たりなさい。騎士団長には、それとなく話を済ませています」

「ハッ！」

アリシアは素早く立ち上がると、王に一礼し玉座の間を後にした。扉が閉じると、部屋の空気が再び張り詰める。

「それでは陛下、理由をお話いたします」

リンリィは改めて王へと向き直ると、その空気を振り払うように微笑み、全てを話した。

闇が深まる森を歩くことおよそ、10分。立ち並ぶ木々の量は徐々に減り、頭上を隔てていた枝も隙間を増している。ほとんど紺に染まった空に、薄く月が輝いているのが見えた。

「急がないと」

静寂が不安を掻き立てる。背中に感じるぬくもりがせめてもの救いだった。隣に話し相手がいないことがこれほど寂しいものだと思にしてみた。

「暗い顔ばかりだな、お前は」

「っ!？」

思わず、叫び声を上げそうになった。心臓がバクバクと鳴っているのがしつかりと聞こえて、身体が熱くなった。レミイを落としそうになって、慌てて姿勢を立て直し、少しだけ落ち着いた。

「お、脅かさないでくださいよ……」

「悪い。まさか、そんなに驚くとは思わなかったんだ」

セシリーは可笑しそうに口元を押さえていた。

「っ……」

叫びそうになったことを思い出して、直樹は赤面した。それが、また面白かったのかセシリーは笑っている。それが恥ずかしくて直樹は顔をそむけた。

「やはり、気にしているのか？」

「別に……」

「さっきの事じゃない。背中……レミイのことだ」

「それは……」

気にしていないはずがない。自分を庇って怪我をした。それを気にしない奴など、いるはずがない。さっきから思い浮かぶのは後悔ばかりだ。

「気にするな、とは言わないが、一つ聞いて欲しい話がある」

無言のまま、直樹は耳を傾けた。その無言を肯定と受け取ったセシリーは、静かに口を開いた。

「まだ、私が小さかった頃の話だ。ある夏の夜のことだ私の住んでいた小さな村に外獣が群れを成して襲い掛かった。

運が悪かったと言えばそれまでなのだが、その日は生憎と村一番の剣士が留守でな、あつという間に村中に入り込まれてしまった。

あとはもうなされるがままさ、それに慌てた母が私を抱えて逃げ出した。だが、直ぐに囲まれてしまつてな……あの時、私を抱いた母の腕がとても苦しかったのを覚えている。母は私を押しつぶすようにして庇ってくれた。

それからすぐ、教会騎士団が助けにやってきたが、遅かった。生き残ったのは私と数人の村人だけだった。泣いた、ずっと、ずっと泣いていた。母のこともそうだが、知っていた人たちが死んでしまったことがとても辛かった。いつそ自分も死んでしまつてればとも考えた。

だが、ある騎士の人が言ってくれたんだ。『君に泣いて欲しいから守ったんじゃない。ただ、笑って欲しいからでもなく、生きて欲しい。そう願って守ったんだ』とな」

悲しげに、それでいてどこか懐かしみながら、一言一言をしつかりと紡いだ言葉だった。

「すぐに理解しろとは言わないが、恐らく、私の母もそのレミイという子もきつと同じ気持ちだったように思うんだ。だから、もう少しだけ肩の力を抜け。そして、その子が目を覚ましたときに『ありがとう』と言ってやれ、それで十分だ。そして、今度はお前が守ればいい。そうだろう？」

問いかけられて、答えを言いよんだのは一瞬。

「はい」

はつきりと答えた。まだ、胸に刺さる後悔という棘は抜けていないが、痛みは少しだけマシになった気がした。

「なぜ、その話を俺に？」

「私はこの記憶を秘めておこうとは思っていない、確かに悲しい記憶だと思う。だが、私は母を誇りに思っている。そして、そんな母の行動を知って欲しいというのは、おかしいか？」

「いえ、全然」

「まあ、話す相手は選ぶがな」

ふふつ、と笑う。

「俺は話しても大丈夫だと？」

「そうだな。お前はなんとなく話してもいいと思った。そういえば、初対面の相手に話すのは初めてだな……。ま、そういうわけだ、お前は問題ない」

形のない感覚を確かめるように、セシリーはしきりに頷きながら、微笑んで見せた。

「ようやく、抜けたな」

左右を取り囲んでいた木々が消え、視界が広がった。空はすっかり日も落ち、月がぼんやりと明かりを落としている。足元にはおおよそ、馬車2台分の幅の道が伸び、弱い風が肌を撫でて、体温を奪っていく。

「その格好では寒いだろう？」

言うが早いか、セシリーは荷物の中から、一着のコートを取り出した。皮製の簡素なものだ。放るように直樹へと渡し、レミィをおぶった直樹は危なげにそれを受け取った。見た目に反して、防寒性能は高かった。それこそ、毛布にでも包まっているように暖かい。

その場所は高台にあるらしく、見晴らしは良かった。

「あそこがその村だ」

街道の先を指差して見せた。

遠くの闇に、淡い明かりのようなものがいくつか浮かんでいるのが見える。

「近、いや結構あるかも……」

明かり自体はさほど遠くに感じなかった。だが、そこへと伸びる街道は丘を跨いで続いている。目的地は見えた。だが、まだ遠いと

実感させられて、直樹は顔を伏せた。

「さ、早く行くぞ」

そんな、直樹に気づいてか、セシリーは促し歩き出す。

「は、はい」

後を追って直樹も歩き出した。

「もう少しだから、頑張れレミィ」

背中で眠る少女にそつと言葉をかける。

「あの場所は、明るければそれなりにいい風景なのだが……残念だ」

名残惜しそうに振り返りながらセシリーは遠さかって行く丘を見つめていた。

明かりまではまだ遠い。だが、踏み出す足はしっかりと大地を蹴って進んでいく。

「そついえば、その剣……お前も剣士なのか？」

唐突な質問に直樹は肩を震わせて驚いた。

「え！？ あ、いやこれは……」

「冗談だ。護身用か何かだろう？ お前は戦うような奴には見えなからな」

「それは、頼りないってことですか……？」

「なんだ、自覚があるのか」

「ええ……」

うなだれる直樹。

「面白い奴だなお前は」

「それ、うれしくないんですけど……」

『迷うな』

夜の街道に響く言葉。赤い髪が風に揺れる炎のように揺らめいていた。

「え？」

「一度抜いたのなら、迷うな。何のために抜いたのか、それを忘れるな……ん、どうした？」

直樹は足を止めていた。止めたままじっとセシリーを見つめている。

「あ、いえ。それはセシリーさんの言葉ですか？」

月明かりに照らされたセシリーの横顔が、どこか悲しそうに見えて、目が離せなかった。などとは言えず、直樹は咄嗟に誤魔化した。「いや、私ではないよ。まあなにせよ、剣を持つなら覚えておけ、というだけだ」

言って直樹の肩に軽く手を置いた。

丘を出発して1時間以上が過ぎていた。

最初のほうは会話も随分していたが、時間を追うごとに会話は減っていた。

両足が重い。

大地から引つ張られるような感覚があった。

そんな様子を見かねてか、一度だけセシリーが「代わろうか？」

と言ってきたが、直樹はそれを拒んだ。セシリーは直樹の意志を感じ取ったのか、それ以上は何も言わなかった。

遠くに見えていた明かりはもうすぐそこにあった。

じつとりと浮かんだ額の汗を袖で拭う。立ち止まればそれまでのような気がして、直樹はひたすらに歩き続けた。

一歩、また一歩と着実に目的地へと近づいている。

背中のぬくもりと、使命感、そして責任感が原動力となって彼を動かした。

「着いたか」

言われて、直樹はたどり着いたことに気づいた。

直樹は何も言わなかった。言えなかった、と言う方が正しいのかもしれない。顔には疲労が目に見えて表れ、額に汗の粒を浮かべて短く息を続ける。だが、顔にはもう一つ表れているものがあった。

それはたどり着いたという達成感。一つの仕事を終えたという充足感。まだ、レミイを助けたわけではないのだからそれに浸るには早いと言え早いのだが、セシリーは特に何も言うことはなかった。ただ内心で直樹に賛辞を送る。

（よくがんばったな）

そこは、村と呼ぶには少し寂しい場所だった。閑散とした大地には広く取られた田畑が広がり、民家と思しき家が数軒と、一際大きな屋敷が一軒そびえ立っているだけだ。

「あの屋敷に行こう。あそこの主人はなかなか良い人だ」

促してセシリーは歩き出す、だが数歩進んだところで振り返る。

直樹の事を気遣ったことだ。

おぼつかない足取りではあるが、ゆっくりとついて来ている。それだけ確認すると、セシリーは再び歩き出す。

数分後、二人は玄関へとたどり着いた。

分かってはいたが、やはり大きい屋敷だ。赤い外壁に白く縁取られた窓が並んでいる。どうやら2階建てのようだ。

セシリーが玄関のドアをノックする。

ややあつて、一人の男が姿を現した。

長身の体格のいい男だ。白いYシャツに薄手の黒いベストという装いにはどこか気品があった。

「どちら……ってまたあんたか。どうした？」

一瞬、驚いた様子だったが、すぐに元の不機嫌そうな表情へと戻る。

「ウイスタル卿、昨日は世話になった。実は、もう一晩泊めてもらいたいのだが、かまわないだろうか？」

「別にかまわねえが、どうしてだ？」

ウイスタルと呼ばれた男が訝しげな表情を浮かべた。

ふと、直樹とウイスタルの視線が合った。

「まあいい、話は中で聞こう」

何かを感じ取った様子で、彼はセシリーを招き入れた。セシリー

に続いて直樹も屋敷へと入っていく。

中はとても広いリビングのような作りだった。適度に暖められた室内には感触のいい絨毯が敷かれ、壁には絵画や、動物の装飾品が飾られている。

暖炉の上には獅子の描かれた蒼い旗が飾られている。

この旗がフェラルディア王国の国旗だということを直樹が知るのは暫く後のこと。

「突然押しかけて申し訳ない。一人、怪我をしている少女がいる。出来るなら、先にそっちを見てもらいたいのだが」

「怪我人か……なら、あんたが昨日使った部屋に、俺はじいさんを呼んでくる」

「了解した。すまない」

セシリーが軽く頭を下げた。

「気にするな」

そっけない言葉を残しウイスタルは奥へと消えた。

「こっちだ」

セシリーに促され、直樹は脇にの階段を昇って2階へと上がった。赤いカーペットの敷かれた廊下を進み、一番奥の部屋へと入る。

先に入ったセシリーがランプをつけた。

そこは、ベッドが二つ並べられた洋風の寝室。

直樹はベッドの一方にレミイを横たえた。

改めてベッドに眠るレミイを見ると、その小ささがよくわかった。

10歳くらいだろうか、そんな少女が身を挺してくれたと思うと、胸が苦しくなる。

直樹は唇をかみ、ぎゅっと拳を握り締めた。

程なくして木製のドアが開いた。ギイ、という軋む音が室内に響き、耳朵をうった。

「わりいな、じいさん」

2人の男が部屋に入ってきた。その1人はウイスタル、それに続くように入ってきたもう1人は、白衣を着た小太りの男だ。

赤みを帯びた顔と、漂う臭気。間違いなく酒の匂いだ。

「この人、酔って……」

不安を零す直樹。

「安心しろつても難しいだろうが、この老いぼれはこれでも優秀な医者だ」

ウイスタルの言葉に「誰が老いぼれだ」と反論しつつ、その老人はレミイへと歩み寄る。安心しろと言われても、すぐに納得できるものでもない。直樹は不安そうな表情のまま、ただじつとその老人へと視線を注いでいた。

老人の名はドミニク。白く染まったわずかばかりの髪と太い眉、うるんだ目はおぼろげに開かれている。

ドミニクは手で触れ、目で見、入念な診察を行った。

「ふむ」

何かを納得した様子でドミニクがレミイから離れた。

「どうなんだ、じいさん？」

「じいさんはやめると言っておるだろうが」

よほど年寄り扱いされるのが嫌なのか、顔をより赤くして反論する。

「なに、それほど心配するほどのことでもなかるうて」

「本当ですか？」

直樹が信じられないといった表情で詰め寄った。

「まあ若干だが、魔力が衰弱しておるようだが、安静にしておけばじきに回復するだろうて」

言ってドミニクはちらつと直樹へと目線を向けた。不安を抱えた黒い瞳が見つめている。

「じゃが、ここは大事をとって、シスターにでも診てもらおうとしよう。容体が急変せんとも限らんし」

ドミニクはウイスタルを目で促した。

「シスターってことは教会か……」

ウイスタルは思案を巡らせた、教会に行くとして必要になるのは

馬車だ。

（馬車か……）

「じいさん、連れて行くのは無理だ」

「どうしてだ？」

「2日前のあれで馬車がおしゃかになったのを忘れたのかよ」

「なあ、もしかすると2日前のあれというのは……」

2日前のあれという言葉が気になってか、セシリーが会話へと割り込んだ。

「ああ、あんたも知ってたな、どうやらあの時のドサクサで馬車の足が壊れちゃった。なんとかここまでは持ったが、修理が終わるまでは使えん」

やれやれといった様子でウイスタルはため息を零した。

「そっぴやあんた、治癒系統は使えないのか？」

思い出したようにウイスタルが問いかけた。

「残念だが、私は戦闘の補助程度のものしか収めていないんだ」

「だとすると、来て貰うほかない、か」

「だが、これから文を出しては遅くなるのではないか？」

「確かにそうだ」

それでは自然回復を待つものなら変わらない。

「やはり……」

「お願いします」

ウイスタルの言葉を遮ったのは直樹だった。

「レミイがこうなったのは俺の所為なんです。俺に出来ることがあるなら何でもします。だからレミイを助けてください！」

直樹は頭を下げた。深く、限界まで曲げた一礼だった。

「そうは言ってもな、ここから教会までは、馬足にしておよそ一日の距離がある。加えて、ここ最近は不当な輩も増えている。はつきり言えば、それほどのリスクを犯すだけの理由が俺にはない」

突き放すようにウイスタルは言った。

その言葉が直樹の胸に突き刺さる。それでも、直樹は頭を下げ続

けた。

「お願いします」

呪文のようにそれを繰り返す。

その呪文に呼び起こされるように、ふとウイスタルの脳裏にある記憶が過ぎった。

（レミイ……レミイ……。まさかとは思いが……）

「小僧、名前は？」

唐突な問いに直樹は目を丸くした。

「名前だ、言ってみろ」

威圧的な視線に直樹は息を呑んだ。そして、

「東條直樹」

とだけ弱弱しく呟いた。

それを聞いてウイスタルの表情が一層訝しげなものへと変わった。

「じいさん、あとは任せる」

「任せる？」

「俺はひとつ走り行ってくる」

「なんだ、お前にしては珍しいな。情にでも目覚めたか」

「なに、別な用件を思い出したただけだ」

「そうか」

ドミニクはそれ以上なにも聞かなかった。

「気をつけてな、無駄な争いは避けるんだぞ」

「分かってる。まあそれは、相手によるがな」

言うが早いかウイスタルは足早に部屋を去った。

その流れを呆然と眺めていた直樹は一体なにが起きたのか理解できなideいた。

「直樹、とか言ったか。ほら、ぼさつとしとらんではよう行け。あやつはああ言っておったが、半分はお前さんとその子のためだ。言うこともあるだろう？」

諭すような口調でドミニクは言った。直樹はただ「はい！」と返しウイスタルを追って部屋を後にした。

直樹がウイスタルに追いついたのは外に出てからだった。

「どうした？」

息を切らせて追ってきた直樹に背を向けたまま彼は言った。

「ありがとうございます」

直樹は頭を下げる。

「気にすんな、用事を思い出した。そのついでだ」

「それでも、言わせてください。俺にはそのくらいしか出来ないです……」

そして、直樹は再び「ありがとうございます」と言って頭を下げた。

「とりあえず俺が戻るまではこの屋敷にいてかまわない。飯はまあ、適当に食ってろ。何かあったらじいさんに聞け」

「わかりました。その…… よろしくお願いします」

「ああ」

背中越しに手をひらひらさせながら、ウイスタルは小屋の中へと消えていった。

程なくして小屋から馬に乗って出てきたウイスタルが走り去るのを見送った直樹は部屋へと戻っていた。

「先に寝るぞ、屋敷にあるものは適当に使ってかまわん。飯も食いたければ勝手に食え」

それだけ言い残し、ドミニクが去っていく。

部屋には直樹とセシリー、そして眠るレミイの三人だけとなった。部屋に少しの静寂が訪れた。

直樹は立ったままレミイを見つめていた。その顔は先ほどよりも幾許か陰しさが消えていた。

「よかったじゃないか」

窓の脇に置かれた椅子に腰を下ろしたセシリーだ。いつの間にか纏っていた鎧を外し、インナー姿になっていた。

その表情は微笑むように穏やかで、視線は直樹へと向けている。ぼんやりとしていた所為で理解が遅れた。

「そう、ですね」

「きつと大丈夫だ。ウイスタル卿はそこらへんの不屈き者に負けたりはしない」

セシリーは言い切った。まるで彼の腕前を知っているかのような口ぶりだった。

「詳しいんですね」

「ん？ ああ、さっき言っただろう。2日前に馬車が壊れたと言っ話だ」

「それが？」

「その時、偶然私もその場にいたんだ」

「もしかして……」

直樹の表情がこわばった。

「外獣ではないさ、最近この辺りを徘徊する盗賊まがいの連中さ」

「助けたんですか？」

「助けた、というよりも巻き込まれた。というのが正しいな。街道を歩いていたら、少し先で馬車が襲われていてな、最初は助けようかと思ったのだが、むしろ助けるべきは盗賊の方なんじゃないかと言っほど一方的だった。そうして立っていたら、勘違いされてしまってな、私がボスカと問われた」

「戦ったんですか？」

少し驚いた様子の直樹。

「いや、剣を……拳というべきかな、なんにせよウイスタル卿と交えることはなかった。だがあの時、ウイスタル卿の動きは只者ではないと思えたよ」

セシリーは感心した様子で語っていた。

「だから、というわけではないが、たとえ外獣を相手にしても彼ならば問題ないだろうと思う。それほどにウイスタル卿は強い。心配などしなくてもすぐに戻ってくるさ」

そう締めくくると、セシリーは立ち上がり軽く背筋を伸ばした。

「さて、腹も空いた。お前はどうか？」

言われて、思い出したように腹が鳴った。

「あ、俺は……」

直樹は料理が苦手だった。両親が海外に居ることが多いため一人暮らしは長いのだが、料理などしたことはほとんどない。最初の頃に1、2度だけ挑戦したこともあったが、結果が結果だけに再び挑戦する勇氣は湧いてこない。

「簡単なものでよければ私が用意しよう。どうする？」

答えは決まっていた。

「食べます」

答え、直樹は先に部屋を出たセシリーの後を追った。

テーブルに並べられているのは、野菜炒めと野菜スープ、そしてパンだ。

それが二人分並べられていた。

そこは広い台所だった。作って直ぐ食べれるようになるのか、テーブルと椅子が置かれている。

「先に食べててくれ、私は軽く片付けて食べる」

セシリーは使った調理器具を洗っている。

待っていいようかとも思ったが、鼻腔をくすぐる匂いと食欲に負けて直樹は箸を取った。

「おいしい」

素直な感想が口からこぼれた。味付けは恐らく塩と香辛料が何かだろう。料理の苦手な直樹に正体が分かるはずもないが、味付けは絶妙だった。

香辛料が諸局を誘い、塩分が野菜の甘味を引き立てている。スープの方も、しっかりとした味があって美味しかった。

「それはなにより」

直樹は次々に口へと放り込んで野菜スープで流し込むようにして平らげていく。それを見て、そうなることも予想して多めに作っていて良かったとセシリーは胸を撫で下ろした。

「ごちそうさまでした」

食べ終わり、片付けも済ませたセシリーは一息いれようとお茶を淹れなおした。大抵のものは昨日泊まった時に覚えたので、迷いもない。

「お粗末さまでした」

セシリーは微笑んだ。

自分の料理をここまで見事に食べてくれた人は今までいなかったというより、誰かに振舞った記憶がそもそも存在しない。

直樹は満腹感からくる充足感に浸っているように見えた。あの少女のことも完全ではないが、概ね解決したわけだ。少しでも肩の荷が降りたと言える。ならばそろそろ良いのではないか、そう思ってセシリーは質問した。

「お前は何処から来たんだ？」

その言葉に直樹は何かが遠ざかるような感覚を覚えた。ここが異世界だということを忘れていた。レミイのことばかりを考えていた。この世界で、自分が異端者だということに今まで気がつかなかった。

「大丈夫か？」

血の気が引いていくような感覚を覚えてたところで声に引き戻された。

「あ、えっと……」

直樹は迷った。

言うべきか、セシリーに真実を伝えるべきなのかと。

「何か言えない事情があるのか？」

直樹は口をつぐんで俯いた。視線が落ち着かない。床を這い回るようにめまぐるしく動き続けている。

「信じて貰えるか分からないけど……」

直樹は意を決して口を開いた。

「俺は違う世界から来ました。詳しいことは、よく知りません」
直樹の告白をセシリーは真剣な表情のまま聞いていた。

そして、何かを思い出すような素振りを見せた後、一言だけ返した。

「そうか」

驚いた風でもなく、馬鹿にしている風でもない。その顔はただそうなのかと、状況を受け止めているように見えた。

「信じるんですか？」

「そうだな、信じていると言えば信じている。だが、信じていないと言えばそうとも言えるな」

「どういう意味ですか？」

「私にも分からないということなのだろうな。だが、お前が嘘を言っているとは思っていない。かと言って全てを信じられるほど、私はロマンティストでもないということだ」

それだけ告げてセシリーは立ち上がる。彼女は切り替えも早ければ行動も早かった。

「さて、風呂にでも入ろうか」

言い置いて、セシリーは扉を抜けて去っていった。

「部屋に戻るか」

一人残された直樹はぼそりと独り言を零すと、その場を後にした。部屋に戻れば当然のようにレミイが眠っている。別段、変わった様子もなく静かな寝息を立てている。窓の脇に置かれていた椅子を寄せてベッドの脇で座る。

（ごめんな）

内心で呟いて直樹は淡いピンクの髪を撫でた。

その後のことは記憶になかった。

「おい、直樹。おい」

呼びかけられて直樹は目を開けた。いつの間にか眠っていたようだ。ぼんやりとした思考でもそれはすぐに分かった。

「セシリーさん？」

「こんなところで寝ていたら風邪を引くぞ」

セシリーは束ねていた髪を解いていた。

湿り気を帯びた赤い髪がだらりと背中の中辺りまで伸びていた。

身体からも湯気が上がり、せっけんらしい香りが鼻腔を撫でた。薄着となったセシリーはあまりに無防備に見えた。すらりとした身体のラインは整っており隙がない。引っ込むところは非婚で居るし出るところはしつかりと出ているのだ。

そんなセシリーをぼんやりと見ていると、強い口調で彼女は言った。

「お前も風呂に入って来い」

反論など許さないといった圧力を込めた瞳が直樹を見下ろしている。長身のセシリーに見下ろされると、それはかなりの威圧感があった。

確かに、今日一日で随分と汚れてしまっている。だが、

「着替えが……」

言い訳じみた言葉が洩れた。

「そんな物は私が適当に見つけてやるからさっさと行って来い」
ぴしゃりと言い切られ、直樹は追い払われるように部屋を出て行った。出るときに風呂の場所は背中越しに聞かされていたので迷うことはなかった。

身体を流して湯船に浸かると、とても落ち着いた気分になった。

夜の風呂はとても静かだった。

静かすぎて逆に不安さえ覚えそうになる。この異世界に取り残されてしまったような、そんな暗鬱な気分が湧き上がって、直樹はかぶりを振った。

（だけど……）

やはり不安は消えない。その不安はレミイのことではない。

『勇者』

レミイの言った言葉が甦る。

そのあとのごたごたでゆっくり考える時間が無かったせいもあって、今まで忘れていたように頭から消えていた。

『お前は何処から来たんだ？』

あの言葉で思い出した。

自分は勇者としてこの世界に呼ばれたとレミイは言っていた。そして、あの剣、聖剣で世界を救うのだとも。

（出来るのかな……）

自問してみるが答えなどなかった。

そもそも、世界を救うということ自体が大きすぎて想像できないのだ。イメージが全く湧いてこない。ただ、ぼんやりと形を持たない何かがある。そんな感じだった。

あの時、森の中で直樹はそれを引き受けるとレミイに言った。だが、それはあくまで彼女の助けになればと思ったからだ。

直樹にとってこの世界との繋がりとは全てレミイに起因する。

直樹はレミイに呼ばれ、そしてレミイから勇者の話をされたのだ。セシリーやウイスタル、ドミニクという新たな繋がりも生まれたが、それも全てレミイから始まっている。

そう考えたら、世界を救うということがなんとなく理解できた気がした。

（守ってみよう。どこまで出来るかわからないけど、レミイを守るう）

直樹は一人決意する。

そうだ、できることから始めればいいんだ。

風呂から上がり、脱衣所に行くと、いつのまにか着替えが用意されていた。見たところ、シャツにズボンといった比較的一般的なもののようなのだ。

この屋敷にあったものだろうか、少しサイズは大きいが、概ね問題はなかった。ズボンに関しては丈が長かったので、裾を折り曲げて穿いた。

なんとなく身体が軽くなったように思った、風呂に入ってリラックスできたこともあるのだろうが、目的を見つけたことも大きいのかもしれない。そして、その為にもこの世界について知る必要がある

ると直樹は考えた。

考えながら、部屋へと戻った。扉を開けて中へ。

「すまないな、それ以上小さいのが見当たらなかった」

窓枠に身体を預けるようにして、セシリーが長い髪をブラシで梳かしている。

「いえ、ありがとうございます。それにしても一体何処から？」

「ああ、その辺の部屋を物色したら出てきた。家主も不在だし聞ける相手もないのだから仕方ないだろう」

「ドミニクさんとかは？」

苦笑しながら直樹は訊いた。

「勝手に探せ、だそうだ」

何も言えず、直樹はこめかみを撫でた。

「ちなみに他の家でやると、まずいのでやるなよ」

「いや、やりませんって」

「ならいいが、この世界の常識のように思われては敵わんからな」
言ってセシリーは軽く笑って見せた。

「そろそろ寝るとしよう。お前はここで、私は隣を借りることにしよう」

「え？」

「ん？ なにか問題があったか？」

「俺が隣で寝たほうが」

「ああ、そういうことか。まさかお前はこんな子供になにかするつもりなのか？」

「し、しませんけど！？ なんとというか、やっぱり抵抗が……」

「却下だ。もし、もしもこの子が目覚めたとして、知らない相手が隣にいたら驚くだろうし、そうでなくても、お前が側に居たほうが安心するだろう」

言い切ってセシリーはドアを閉めた。

これ以上、交渉の余地はないらしい。

直樹は覚悟を決めた。

明かりを消そうとランプに近づき調べてみる。見れば台座の部分になにかスイッチというか、ダイヤルのような突起物がある。直樹はおもむろにそれを指先で摘まむと、ゆっくりと回した。

（なるほど）

右へと回せば明るくなり、左へと回せば暗くなるという簡単な仕組みのようだ。

明かりを消して、ベッドに横たわり、シーツに包まって目を閉じる。

ちょうどそのとき、窓から光が差し込んで、部屋を照らした。月を覆っていた雲がはれたのだ。

目を閉じたまま、直樹は隣で眠る少女に声をかけた。

「おやすみ」

いろいろあった所為か、睡魔は直ぐにやってきた。

意識が段々と遠のき、ゆっくりと直樹は眠りへと落ちていった。

04……ウイスタル

「危ないっ！」

叫び、直樹は身体を前へと走らせる。地を這う木の根に足を取られようが、恐怖で震えようが構わず前へと進めた。

体当たりを思わせる勢いのまま、がっちりと大事なものをぎゅっと握り締めるように、強く、それでいて慎重に抱きとめる。

そのまま、直樹は地面を転がった。

泥を跳ね飛ばし、突き出した根にぶつかって呻き声を漏らしながら二転、三転してようやく止まった。しかし、抱きとめた少女を決して放したりはしない。転がるときも出来る限り庇ってみせた。

身体の内側が痛いと思鳴を上げる。だが、何時までも地面に突っ伏しているわけにはいかない。

奥歯をかみ締めて直樹は立ち上がる。

眼前には巨大な狼。『タイラント・ウルフ』と呼ばれる外獣がそばえていた。

射抜くような鋭い眼光を向ける『タイラント・ウルフ』、半開きの口からは涎が滴り落ちている。冷や汗を浮かべながら、直樹は少女を抱いたまま走り出した。

背中には悪寒が付きまとっている。まるで見えない手に引つ張られるような感覚を受けながら、直樹はまるでその見えざる手を振り払うように走り続けた。

「伏せろっ！」

その声に直樹は無意識に反応していた。

瞬間、頭上を何かが駆け抜けた。

赤い髪を靡かせて、それは舞うように駆けていた。

赤い光を全身から放ちながら、『タイラント・ウルフ』へと迫る。赤い光が膨らみ、閃光を放つ。膨らんだそれは薄闇の森を照らし、

深緑の森を白亜に染めた。

「また。また助けられちゃいましたね」

少女は赤みを帯びた顔で直樹を見つめている。

「ありがとう」

その表情は満面の笑みだった。思わず直樹がドキッとするほどその顔は可愛らしかった。

そこで直樹は気がついた。

——これは何だ？

白い縁取りのなされた窓から、日の光が差し込んできた。

その光が閉じた^{まぶた}瞼を照らし、直樹はうつすらと目を開けた。

ぼんやりとした思考を巡らせながら、直樹は隣へと視線を移す。並べられた隣のベッドでは、静かに少女が眠っている。

「おはよう、レミィ」

声をかけても返事はない。分かっていたが、やはり寂しく思ってしまう。それに……

「かつこわりい……」

呟いて、再びベッドへ横たわった。

確かに後悔はしていた。だが、よりにもよって夢の中でやり直すなんて。ベッドの上でうねうねと悶えながら、かつこわるいを数珠繋ぎに吐き出していく。

「最悪だ」

吐き捨てるように言って身体を起こす。暗鬱な気分は晴れないが、ずっとこうして寝ているわけにもいかないのだ。

「昨日、決めたじゃないか」

それは小さな覚悟。

隣で眠る少女を守る。

そう決めた。

そして、そのためには行動しなければならない。

『できること』はやらなければ実現しないのだ。

ベッドから降りて立ち上がると両足が痛みを訴えた。

それは、間違いなく筋肉痛だった。日ごろの運動不足が悔やまれる。

「いてて……」

だが、こんなことで挫けていてはしょうがない。

直樹は部屋を出ようとドアへと近づいた。

その瞬間——ドアが開いた。

ゴン、という鈍い音の後に、うめき声が続き、人を床が受け止める音が締めくくる。

「す、すまない!？」

慌てて駆け寄ったのは赤い髪を称えた女性だ。

床には顔を押さえて蹲る直樹の姿がある。

「まさかお前がいるとは思わなくて……」

直樹としては『まさか突然ドアが開くとは思ってもみなかった』ことだろう。

なみだ目で立ち上がり駆け寄ったセシリーに手で大丈夫と示しながら、すこすこベッドへと戻っていく。出鼻を挫かれるとはまさにこのことか。

直樹はベッドに突っ伏して痛みが落ち着くのを待った。

「すまなかった……」

直樹は無言だった。「大丈夫」やら「気にしないで」と言いたいのだが、今はそれどころではない。

数分の後、ようやく痛みも落ち着き、直樹はようやくセシリーに答えることが出来た。

「本当にすまなかった……」

「いや、大丈夫。おかげで目が覚めた」

軽い冗談混じりに笑ってみせる直樹の鼻頭と額は赤くなっていた。

「すまない」

「もう、いいですから。それより、お願いがあるんです」
頭を下げるセシリーを制し、直樹は切り出した。

「俺は少しでも強くなりたい。俺はまだこの世界に来て日も浅いし、なにも分かつちやいないけど、レミイに守られて、セシリーさんに助けられて……思ったんです。『嫌だ』って……だから、俺は強くなりたい。この世界のこと自分自身のことをもっと知りたい。だから、教えてください」

頭を下げて目を閉じる。

「私は、人にものを教えるのは得意ではない……」
セシリーが静かに口を開く。

「だがそれより、私は断ることが得意ではないのでな」
彼女は微笑み言い続ける。

「私の出来る範囲で、それとウイスタル卿が戻るまでだ」

「ありがとうございます」

再び直樹は頭を下げた。

大地を照らす太陽の熱は午前中ということもあってか涼しさを覚える。時折、心地の良い風が吹き、体温を適度に奪っていく。この空の下で昼寝すればさぞ快適だろう。

そんな誘惑を振り払い、二人は屋敷の裏に立っていた。
「教えるとは言ったがどこから教えればいい？」

下ろしていた髪を束ねながら、セシリーが訊いてくる。

「えっと、最初からお願いします」

「最初から……といわれてもな、私は人に教えたことなどないし、最初という基準がわからん」

「じゃあ、実践的なやつから」

「それなら、簡単だ」

束ね終えて、軽く頭をふって整える。

赤い髪がふわりと揺れた。

「自分の間合いにまで近づいて斬れ。以上だ」

「え？」

言って踵を返すセシリー。

「それで終わりですかっ!？」

「ふふ、冗談だ。冗談」

二、三步進んで振り返る。直樹は本当に驚いていた様子で、それがなんとも面白かった。

笑みの張り付いた顔を空へと向けながら思い出す。

自分が初めて剣を教わったとき一体、何を習った。

何から始めた。

「お前、魔力は使えるか？」

聞きなれない言葉に一瞬、直樹の表情が強張った。

いや、聞きなれないわけではないが、それは現実のことではない。あくまで、仮想現実ゲームの中の言葉だと思っていた。身をもってそれを聞いても現実味が全く沸いてこない。

「使えるも何も、俺のいた世界に魔力なんてなかったんで……」

その言葉を聞いたセシリーは固まった。

異世界の住人ですと言っても驚かなかったセシリーが呆然と立ち尽くしている。

「魔力のない世界で、どうやって人は生きるというのだ」

どうしても信じられないといった様子でセシリーは直樹を見つめる。その瞳にはどこか恐れのようなものが混じっていた。

「ならば、ならばどうしてお前は魔力を持っている？」

「え、俺がですか？」

「確かにお前からは魔力を感じる。魔力のない世界の住人であるお前が何故、魔力を持っている？」

「そう言われても俺にもさっぱり……」

首を傾げる直樹。

彼には自身に魔力があることさえ分からないのだ。

数分の問答の後、魔力の基礎から始めることで決着がついた。

だが、あくまでもセシリーは魔力が存在しない世界を信じてはいない様子だ。

「まずは自分の魔力を感じ取ることから始めよう」

セシリーは直樹に魔力の概念を教えた。

「魔力と言うのは血であり肉であり精神でもある。そして、この世界そのものでもあるんだ」

魔力とはこの世界を形成する根幹であり、生命力そのものとなるものなのだ。魔力はその量に差はあれど、全ての生命に与えられており、呼吸によって体内に魔力を取り込むことで生きている。

だからこそ、セシリーには魔力のない世界があるということをもどくしても信じる事が出来なかった。セシリーだけでなくこの世界の人々は魔力に支えられて生きている。そんな世界の法則が崩れることなど想像ができないのだ。

語りかけるように言葉を紡ぐ。

「自らの内にある力、鼓動を感じる」

直樹はただ、立ったまま目を閉じて集中する。

「呼吸の度に意識しろ」

深呼吸。

「五感で感じる」

意識は内へと落ちていく。セシリーの声も遠く、自然が奏でる音も耳に入らない。感じるのは心臓の鼓動、血の巡る感覚。そして、もう一つ。

（温かい）

ぼんやりとだが身体に感じる温かさ。全身を覆うようにそれは感じられた。

直樹にはそれが魔力なのだとは分からない。ただ、セシリーの言葉がなんとなく理解できるように思えた。その理由も定かではないが、直樹は確かに感覚を掴んでいた。

「ほっ」

セシリーは思わず感嘆の声を漏らした。

まさか、これほど短時間で魔力を感じることが出来るようになる
とは全くの予想外だ。

彼女自身、初めて魔力を感じ取れるようになるまでには2日ほどの時間を必要とした。それでも早いと驚かれたほどだ。対して直樹は僅か数時間で魔力を認識できている。これには驚きも沸いてさえ来なかった。

驚きを超越した感覚とでもいえるのだろうか。それは、目の前に起きた現実を、『そうなんだ』と、ぼんやりと認識している。そんな感じだった。それと同時に、少し、ほんの少しではあるがくやしいとさえ感じてしまう。

（これも才能か）

分かつてはいても納得は出来ない。

そんな思いをセシリーは振り払うように言葉をかける。

「まったく……言葉も無いな」

「？」

緊張を解すように息を吐く直樹。

「何を感じた？」

「……」

「目を閉じている間、何か感じたものがあるだろうか？」

「温かさ、なんていうか、全身を包んでいるような温かさを感じたような……感じなかったような……」

それがはつきりしないのは形がないからなのだろう。手で触れたり、目で見たり出来れば確かな存在として認識できるのだろうか、直樹はまだその域に達してはいない。だから曖昧なのだ。

「それが魔力だ。お前の命の流れそのものだ」

魔力とは血であり肉であり精神である。その言葉が脳裏に呼び起こされる。

「その感覚を忘れるな」

セシリーの言葉を身体に溶かすように聞き、直樹は頷いた。

「いずれ魔力を収束できるようになれば、魔力そのものが見えるよ

うになる」

セシリーは軽く深呼吸して自身の魔力を高めていく。ややあつて目に見える形で変化が起こった。

赤い光だ。セシリーの身体から赤い光が淡く放たれている。

「私の魔力光は赤だが、これは個人によってさまざまだ。お前の魔力光は何色なんだろうな」

直樹は目が離せなかった。初めて見たということも大きかったが、光を纏ったセシリーが神々しく見えたからだ。

セシリーが腰に挿していた剣に手をかけた。

「そして、慣れればこういったことも出来る」

軽く慣らすように肩を回し、セシリーは剣を正眼の位置で構えた。魔力が高まっていく。高まった魔力を剣に込める。意識してではなく、それはごく当たり前の動作の一部として行ふ。それに平行して剣を振る。全力ではなく、流すような動作だ。

振り下ろすと同時に解き放つ。ただ放つのではなく一塊に^{いっかい}。

魔導剣術の基礎——魔刃。

固めた魔力を刃に模して放つ技だ。

「これは初歩的なものだが、経験を積みれば他にもいろいろと出来るようになるさ」

「へえ……」

気のない相槌を返しながら、直樹は未だ身体に宿る興奮を抑えられないでいた。

そして、湧き上がる思いはより強固な意志となつて固まる。

（強く、なるんだ）

やや寒い夜風を馬上で受けながら、暗い夜道を駆け抜けていく。
「アリシア……」

零れたのは懐かしい響きの名だ。

（レミイ……まさかとは思うが）

人違いであればそれはそれでいい。

だが、もしこの予想が当たっていたら自分はどうすべきなのだろうか。

レミイという少女。その名を彼は数年前に聞いたことがあった。

アリシア・C・バーミンガム……

その名が思い浮かぶと同時に、彼が置いてきたはずの過去が、脳裏にその姿を表した。

この国において名前に含まれるアルファベットは王家との血筋を示すものである。Aから始まり、血が薄くなればなるほどアルファベットは進んで―とはいえ、流石にEかFくらいまでで打ち止めであるが―いく。

アリシアの場合だとおよそ三番目の家系にあたるということになる。当然、血の濃いほうが王位継承権の際有利に働くのだが、当然、Aの名を持つ者がそれにあたる。

だが、今の王には子供が生まれなかった。正確には流産であるが、結果として子供がいらないという結果に代わりはない。またこの国の王に再婚は認められておらず、まさか内縁の妻を持つわけにもいかない。それ以前に今の王に、その気がないのだ。

そうなると自動的に王位継承権はB名を持つ家系へと移ることになる。

そして、彼……ウイスタルの名は―ウイスタル・B・リヴィン。リヴィン家の子息。つまり、次の王位継承権を持つ家系ということだ。

そうなったとき、貴族たちは浅はかな知恵をめぐらせた。

このまま行けばBの家系が王家の正当な血筋となる。そこから血の濃い順にアルファベットが振り直されることになるのだ。

今はCであつても血縁関係によつてはDやEになることもあるのだ。

ならば簡単だと彼らは考えた。Bの血族になればいいのだ。

そして、ウイスタルとアリシアの縁談が持ち上がった。

親族どうしの婚姻。それ自体は不思議なことではなかった。王家の血筋を少しでも汚すまいと、この国では古くから行われてきたことだ。

ウイスタルの父は貴族にありながら家の繁栄にあまり熱心ではなかった。

はつきり言えばリヴィン家は貴族たちの中で最も貧乏なのだ。

温厚な人柄で、争いを好まず、ただ静かに暮らすことを望んでいた人だった。Bの名を持っていたのは国王であるマルクスの弟であるために過ぎない。彼は貴族でもなんでもない女性を愛し、周りの反発をよそに、結婚した。

その時は大きな反発を生んだものの、王妃の妊娠と同時にそれもやんだ。結局、王位継承権は王の子息に送られるものなのだ。ならば、貴族たちはその子息にどうやって縁を作るかに奔走する。Bの家系がどうなるかと知ったことではないというのが本音だ。

だが、結果は流産。母体もその折に帰らぬ人となり、王の子息はそこで潰えた。

そうしてウイスタルに王位継承権が移ると貴族たちはざわめいた。それまでリヴィン家を正当な血筋ではないだの、理に反した没落貴族だのと蔑んだ者達。だが、王位継承権はそれさえも黙らせる魅力があった。手のひらを返したように取り入ってくる大人たちをウイスタルの父は跳ね除けた。

だが、バーミリオン家との縁談だけはなぜか断らなかった。むしろ明確な意思を持って彼は話を進めていた。

今思えば、父は二人の気持ちに気づいていたのかもしれない。フェラルディア王国には徴兵の義務がある。たとえ貴族であろうと、免除されることは無い。女子には強制はなく、本人の意思が尊重されるが、男子は強制だ。

幼少のころから剣を習っていたウイスタルは、持ち前の運動神経

を如何なく発揮し、武術において常にトップを独占していた。魔術に関しては平均的なものであったが、剣の腕は正騎士さえ凌駕するものであった。

そんな彼に続き、アリシアもその才能を発揮していた。

剣の腕ではウイスタルに及ばなかったものの、順位で言えば2位。ウイスタルが苦手とする魔術に関しては彼女に勝る者はいなかった。

腕っ節が自慢の男たちがひしめく中にあってこれは驚くべきものであった。

徴兵の期間中、家名は秘匿されている。これは格差をなくすために行われており、訓練を監督する騎士たちにも一切、明かされない。全ての者は個人として扱われ、そこに身分など存在しない。まれにそのことをしつかりと理解できていない貴族が喚いたりもするが、聞く耳を持つものなのはいはしない。代わりに鉄拳による制裁が下されるばかりか、期間中ずっと、腰抜けとして見られるのだからたまったものではないことだろう。

ウイスタルにとってそこはウイスタル個人としていられる数少ない場所だった。

貴族たちからは蔑まれ、平民たちは貴族として遠い存在のような視線を向ける。そんな場所から開放された生活を彼は氣に入っていた。

ある日の訓練で二人は手合わせを行った。二人が組まされた理由は他に相手となるものがいなかったからだ。

手合わせの後、二人は初めて会話をした。それがアリシアとの出会だった。

会話の内容までは思い出せなかったが、その時アリシアのことをとても誠実な人だと思ったのは覚えていた。

他者を寄せつけないウイスタルと近寄りがたい雰囲気を持つアリシア。

もしかすると、何処かで通ずる部分があったのかもしれない。

それから二人は頻繁に言葉を交わすようになった。家の名こそ話さなかったが、お互いの過去などを打ち明ける仲にはなっていた。そして、徴兵の期間が過ぎ、二人は元の場所へと戻るときが訪れた。もしかすれば二度と会うことも無い可能性もある。

そう考えて、ウイスタルはそのまま志願することを決めた。

アリシアが騎士になるというのは本人から聞いていたし、あれほどの実力を持つ人材を騎士団が放って置くはずがない。同じようにウイスタルもまた勧誘を受けていた。

剣を握ることは嫌いではなかったし、彼は貴族というものに興味などなかった。うんざりしたというのが正直なところだ。出来ることならこのまま一人の騎士として生きてもいいとさえ思いはじめていた。

これがいいきっかけになった。

そうして選んだ道を彼は歩き始めた。

アリシアと会うことはなかったが、騎士としての日々はそう悪いものでもなかった。

やがて、実力も後押しして彼は小さな部隊を任されるようになった。

運も良かったのだろう。配属された先の騎士たちは彼の家柄など気にすることもなく接してくれた。

そこには貴族としてのウイスタルは存在しなかった。

王位継承権のことと他人事のように感じていた。

アリシアとの縁談には驚いた……というより彼女が貴族の娘であったことのほうが驚きだった。

それを知ってから再び二人は良く会うようになっていた。

アリシアとの婚約のことも含めてウイスタル自身、このまま……

とさえ思いはじめていたとき、それはやってきた。

貴族という現実が最悪の形となって襲ってきたのだ。

ウイスタルの父が殺された。

暗殺。

それは誰にでも分かることだ。

リヴィン家は当主が王の弟だということで作立していたにすぎない。その妻も元はただの平民だ。その間に生まれたウイスタルに味方するものはそう多くは無い、支えとなる柱を砕かれてはいつ空中分解してもおかしくは無いような家だ。

当主が倒れ、家としての機能が果たされなくなれば、当然その意味を失う。Bの名を持つ家が潰れれば王位継承権はCの家へと移るのだ。

ウイスタルの父が望んでいた穏やかな生活はそれほどまでに脆弱なものだったのだと思い知らされた。

家の繁栄に力を注ぎ、幾多の支援者を持っていればこんなときになんて対処も出来たはずだ。国王である兄の名を使えばそれくらいことは出来たように思う。思えるだけウイスタルも大人になっていた。

そうして現実というナイフの刃を喉元に突きつけられて、ウイスタルは騎士であることを辞めた。

辞めて何がしたかったかと言えば復習だ。

彼は父を殺した者を探した。騎士としての人脈がこのときに活きたのは本人にとってありがたいものだった。

そうして全ての真相を知って、ウイスタルは愕然となった。全てがどうでもよくなった。

このまま行けばリヴィン家は事実上消滅するのは時間の問題だった。父が亡くなったあと、母も後を追うようにしてこの世を去った。残されたのは比較的少な目の使用人たちとウイスタルだ。

そこで、ウイスタルは王位継承権の放棄と引き換えにいくつかの確約を王と交わした。

王都を離れる日、アリシアとのやり取りが思い起こされる。

「逃げるのか？」

問われたウイスタルは無言だった。疲れきった瞳がアリシアを見つめている。

「私は進むべき道を進もうと思う。全てを賭けるに値する人を、私は見つけた」

アリシアの言葉を無言のまま聞き続ける。

「王国の騎士としてではなく、教会騎士として私は守るべきものを守ろうと決めた」

揺るがない瞳を向けるアリシアの視線がとても痛く感じた。

とてもではないが自分にはあんな眼は出来ないと思い、それがなんとなく腹立たしく感じた。

「すまなかった」

ウイスタルは「なぜ？」と言おうとしたが言葉にならなかった。

アリシアの「すまなかった」というのは一体何にたいしてなのだろうか。人一倍責任感の強い彼女の事だ。関係ない事にまで責任を感じているのかもしれない。

そんな風に考えて、ウイスタルはさらに思い知らされた。

家がこうなったことの責任は自分にあるのだ。

貴族ということ忘れて騎士をやっていた自分がとても惨めに思えて仕方が無かった。

その後もアリシアの話聞いていたがほとんど記憶に残っていない。

だが、1つだけ印象に残る話があった。

その中に『レミイ』という名が出てきたのだ。

彼女はその『レミイ』という少女を守りたいと、しきりに言っていた。

そう語るアリシアをまぶしくも遠い存在だとも感じながら、ウイスタルは王都を去った。

そうして貴族というごたごたから解放されてウイスタルはあの辺鄙なところへと移り住んだ。どうしても聞かない古い使用人たちもあそこで細々と暮らしている。ドミニクもその一人だ。

それから3年の月日が流れアリシアと会うことも無くなった。

(なんにせよ、アイツには知らせてやらないと)

アリシアが守りたいと言っていた少女かも知れない。その可能性があるならば彼は動かすにはいらなかった。

そこまで考えて、ふと感じたことがあった。

数年の歳月が経ってなお、未だに未練でもあるというのか。全てを捨ててここに来たはずだったのに、よく分からない少年の一言でこうして夜通し走っている。

（単純だな）

自嘲して、空を仰ぐ。雲が月を覆い隠していたようで、その光は遮られたままだ。視線を落とし、前を見る。薄暗い夜道は不気味ささえ漂わせながら伸びていた。

彼は進み続ける。誰かのためではなく自分のために。

城下町は活気に満ちていた。港では取れたての魚が水揚げされ、諸外国と取引された輸入物が搬入され、輸出品物を積み込んでいる。

男たちは、汗を流し、声を張り上げながら作業を進めている。市場では客寄せの声が絶え間なく響き、通りは客や通行人でにぎわっていた。

そんな中で明らかに不似合いなものだと彼女は思う。この中で脇に騎士の格好をした侍女4名を従えた格好ほど人目を引くものはないだろう。大道芸人でさえ芸を忘れ、こちらに釘付けという有様だ。「シスター、リンリイ。今日もまたお出かけですか？」

道を歩いていると、不意に老婆から声を掛けられた。知ったかおだ。毎日教会に祈りに来ているのを覚えている。

「ばあさん。シスターじゃなくてビショップ、リンリイ様だろ」

と、向かいの店の主人が訂正する。

「いいいえ、シスターで構いませんよ。ねえ、おばあさま」

微笑みながらリンリイは老婆の手を握った。骨に薄い皮がかぶさっただけのような、華奢な手だった。

「今日はどちらにおでかけですか、シスター」

「助けを求める方々の下へ」

「そうですか。きつと精霊様がお守り下さることでしょう」

「ありがとう。おばあさまに、精霊の加護があらんことを」

リンリイが胸の前で両手を合わせ、祈る。

「精霊の加護があらんことを」

老婆も同じように、祈りをささげる。この世界では一般的な慣わしだ。

神がいて、その使いである精霊の導きで人は存在し、生きているというのが、信仰の基本である。教会はその神の名の許、精霊と交信することで身を清める場所だと信じられている。

それとは別の顔を教会は持っていた。

通称『教会騎士団』と呼ばれる独立した戦力だ。

如何なる国家、主義、主張をも超えて、ただ人を守るという理念の下に結成された騎士団だ。

志の高さゆえ志願者は多い。だが、その志願者の多くは一般人であり、危険の割りには見返りが少ないことから優秀な魔導師や騎士が志願してくることは少ない。それゆえに万年人手不足という問題を抱えている。

しかし、世界中に教会という支部を持ち、各国との独自のパイプを持つ教会はどんな国であれ無視は出来ない存在だった。

また、保有する人数こそ少なけれ『教会騎士団』は精鋭が揃っている。その戦力は、小国の正騎士団さえも凌駕しているとさえ言われている。

老婆と別れ、リンリイは王都の中心部を抜けて門へと向かった。周囲を高い防壁に囲まれ、その防壁の周りには水路も兼ねる堀が囲んでいる。その堀に一箇所だけ可動式の橋を掛けた場所、港を除けば、陸から唯一王都に出入りできる場所だ。

王都の南側、城へと続く大通りの始点にして終点。

リンリイは晴れやかな空に見送られるように馬を進ませ橋を渡っ

ていく。出発には最高の天気だ。

「お手を煩わせることになってしまい申し訳ありません。妹のレミイ様が行方不明という時にこのような……」

侍女長の女性が申し訳なさそうな表情を浮かべている。彼女はリンリイの侍女長であり教会騎士の一人でもある。

「それは、仕方が無いことです。別に誰の所為でも……いえこれは私の責任ですね。わたしがもう少ししっかりしていればこのような事には……」

言つて、リンリイは目を伏せた。

「いえ！ 決してそのようなことは！」

大きく首を振って侍女長が否定する。

「使いとしてあの子を推したのは私です。せめてもう一人送るべきでした。私のミスです」

侍女は押し黙るしかなかった。否定ならいくらでも出来る。だが、それをしたところで水掛け論だということもわかっている。

ならば――。

自分に出来ることをするだけだ。命を掛けてこの方をお守りすることこそが、自分の使命なのだ。

「行きましょう。一刻でも早く、助けを待つ方々のもとへ行かなければなりません」

話を切るようにリンリイは馬を進める。部下の心遣いには感謝している。だが、教会を率いる者として、それに甘えるわけにはいかない。

ありがとう。

リンリイは心の中でつぶやいた。

（無事でいて……）

祈り、願う。ただ、強く。それは、立場や使命とは関係ない真っ直ぐな気持ち。だが、それを表に出すことはない。妹とはいえ、あくまで部下の一人だ。搜索は行っているが、状況しだいでは当然、断念することも考えねばならないだろう。そうなった時、自分が冷

静でいられる自信がどうしても持てない。

それはやはり、自分が上に立つものとしてふさわしくないのではないかとさえ思う。かといって全てを放り出すようなことも出来ない。ギシギシと心が軋む。いくら思い悩み、考えようとも、答えはその時が訪れるまで出ることは無いのかもしれない。

今はあの子を信じるほかに術がない。ただ無事を祈り、部下が見つけてくれることを待つほか無い。幸い搜索を担当しているアリシアはとても信頼の置ける人物だ。彼女に任せておけば大丈夫。そう心から思えるほどにリンリイはアリシアを信頼している。だからこそ任せたのだ。

リンリイは迷いを振り払うように顔を上げ、思考を切り替えると、馬を進ませた。

ぼんやりと照らされた薄暗い一室に幾人かの貴族たちが集まっていた。一様にローブを纏っていることから、これが公式なものではないことは一目で分かる。国政という中に生まれた闇という部分。闇という見えない力。時にそれは一国の命運さえ決めてしまうだけの影響力を持っていた。

貴族会。名前だけは知っている者も多いが、その存在を知るものはごく僅かだ。その僅かにあたる者達が今ここに集まっていた。

「教会はあの計画を失敗したようです」

「ふん、所詮はおとぎ話ということか」

「それを信じるあたり、あの女もまだまだ青いということか」

「やはり、この国はより良き指導者が必要ということですか」

「王位継承権を宙に浮かせたまま、一体何を待っているというのか」

「ともあれ、なんとしてでも王位継承権を手に入れねば」

「順当に行けば、今はEの家がそれにあたるはずですが」

「あの家は駄目だ。当主が堅物すぎる」

「ならばどうされます。まさか2度も暗殺などというわけにはいき
ますまい」

「それには及ばんよ、既に手は打ってある」

「なればFの家ということですか」

「あの家は長らく苦汁を舐めてきた。付け入る隙は多い」

「なればわが娘を使いましょう」

「しかし、それではあからさま過ぎではないか」

「表向きは反対を押し切つての結婚という形でならどうともなり
ます」

「ふむ、では任せよう」

「かしこまりました」

一様に目を合わせ、それを合図に一人が席を立った。

追う様に一人、また一人と席を立ち、闇へと消えていく。やがて、
最後の一人になった。

「みなさま、せいぜい頑張ってください」

笑みの混じった言葉は薄闇の部屋へと溶けていった。

04……ウイスタル（後書き）

またまた遅くなりましたが、04更新です。

ここいらで少し世界のこととか、キャラクターの背景とかを書きました。もう少し後にしようかとも思ったんですが、いろいろな展開も……そろそろ2章のこととも考えないといけないので、今回で書くことにしました。

最後の方とか黒々とした部分を抜き出したような状況です。彼らが一体何を企んでいるのやら……

05では主人公を中心にもう一波乱起こしたいなと思っています。

随時、皆さんの感想をお待ちしています！

ここまでお読みいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6149p/>

召喚《よ》ばれた異世界《さき》で

2011年2月16日14時10分発行